

口ミノヲ谷古墳

—四国横断自動車道開設に伴う発掘調査報告書—

1984.3

日本道路公団
高知県教育委員会

序

近年、高知県においても開発の波は強くなり、高知空港の拡張に伴う田村遺跡の調査など大規模な発掘調査も行われ、年間調査件数も増加の一途をたどっております。

口ミノヲ谷古墳も四国横断自動車道建設に先だつ調査でした。県内においては過去の開墾などにより多くの古墳が消滅している状況にあり、現存する古墳、さらには未発見の古墳や遺跡の保護・保存を強く押しすすめていかなければなりません。

口ミノヲ谷古墳は完全に残されてはおりませんでしたが、横穴式石室を検出するとともに種々の遺物が出土し、貴重な成果をおさめることができました。

本報告書はこの成果を広く活用し、古墳時代研究の資料としていただくため、刊行するものであります。最後に、刊行に当たりまして御指導、御協力いただいた方々に深く感謝いたしますとともに、刊行の御挨拶と致します。

昭和59年3月

高知県教育委員会

教育長 中 村 哲 男

例　　言

- 1 本書は四国横断自動車道建設に伴い、昭和58年11月1日～30日に調査を行った口ミノヲ谷古墳の発掘調査報告書である。
- 2 遺跡名については尾谷遺跡（調査時には八反田遺跡と呼んだが現名称とする。）から古墳が発見されたことにより、口ミノヲ谷古墳と改称した。
- 3 調査は日本道路公团大阪建設局の要請により、高知県教育委員会が委託を受け、文化振興課において、岡本健児（高知女子大学教授）を顧問とし、森田尚宏が担当となり実施した。事務、総括には横田勇、宅間一之があたった。
- 4 遺物整理・報告書作成は森田が行い、編集は高知県教育委員会である。
- 5 本書に使用した海拔高は、日本道路公团設置の水準点を基準点とした。また図中の方針は磁北を示すものである。
- 6 遺物の実測図は土器1/3・1/4、装身具2/3、鉄器1/2とし、写真もこれに準じており、遺物の番号はすべて実測図の番号と同じとした。
- 7 調査にあたっては、日本道路公团大阪建設局高知工事事務所、高知県土木部高速道対策室、高知県土地開発公社ならびに南国市教育委員会、地元領石地区、高知大学考古学研究会には御援助、御協力をいただいたので記して感謝するものである。
- 8 出土遺物は高知県教育委員会文化振興課が保管の任にあたっている。

目 次

I 調査に至る経緯.....	1
II 位置と環境.....	3
1 位 置	
2 歴史的環境	
III 調査経過.....	7
1 古墳の調査	
2 水田部の調査	
IV 古 墳.....	9
1 墳 丘	
2 石 室	
3 遺物の出土状態	
4 弥生住居址	
V 遺 物.....	16
1 土 器	
2 鉄 製 品	
3 装 身 具	
4 弥生土器・土師質土器	
VI ま と め.....	20

図 目 次

第 1 図 四国横断自動車道路線内遺跡分布図.....	2
第 2 図 周辺の遺跡	4
第 3 図 発掘区設定図.....	8
第 4 図 調査前地形測量図	10
第 5 図 調査後全体測量図・セクション	11
第 6 図 石室実測図	15
第 7 図 遺物出土平面図.....	15
第 8 図 出土遺物(1) 装飾品	19
第 9 図 出土遺物(2) 弥生・土師質土器	19
第10 図 出土遺物(3) 須恵器	27
第11 図 出土遺物(4) 須恵器	28
第12 図 出土遺物(5) 須恵器・土師器	29
第13 図 出土遺物(6) 鉄製品	30
第14 図 出土遺物(7) 鉄製品	31

表 目 次

第 1 表 周辺遺跡地名表	5
第 2 表 須恵器観察表.....	22
第 3 表 鉄錆計測表.....	25
第 4 表 金環計測表.....	26
第 5 表 玉類計測表.....	26

図 版 目 次

PL 1	1. 遺跡遠景(北東より)	2. 古墳遠景(北東より)
PL 2	1. 調査区全景(北東より)	2. 古墳近景(北東より)
PL 5	1. 石室発見状況	2. 石室検出状況
PL 4	1. 羨道閉塞状況	2. 羨道閉塞・遺物出土状況(玄門より)
PL 5	1. 羨道遺物出土状況	2. 羨道遺物出土状況
PL 6	1. 羨道左壁遺物	2. 羨道右壁遺物
PL 7	1. 玄室左袖部遺物出土状況	2. 玄室左袖部鉄器出土状況
PL 8	1. 玄室左袖部轡出土状況	2. 玄室右壁鉄鋸出土状況
PL 9	1. 墓道遺物出土状況	2. 周溝遺物出土状況
PL 10	1. 石室全景・掘方プラン	2. 玄室敷石
PL 11	1. 羨道左壁石組み	2. 羨道右壁石組み
PL 12	1. 玄室左壁石組み	2. 玄室右壁石組み
PL 13	1. 石室全景(敷石除去後)	2. 奥壁抜取痕
PL 14	1. 墳丘・掘方北側セクション	2. 墳丘・掘方東側セクション
PL 15	1. 南壁裏面・住居址検出状況	2. 完掘全景
PL 16	須恵器(1)	
PL 17	須恵器(2)	
PL 18	須恵器(3)	
PL 19	須恵器(4)	
PL 20	1. 鉄製品(1)	2. 鉄製品(2)
PL 21	1. 鉄製品(5)	2. 鉄製品(4)
PL 22	1. 装身具	2. 弥生土器・土師質土器

I 調査に至る経緯

高知県においても、近年交通網の高速かつ大量輸送化が叫ばれ、その整備に力が入れられており、ジェット化に伴う高知空港の拡張、さらに四国横断自動車道の建設などが重点的に行なわれている。これに並行して埋蔵文化財の調査も行なわれており、特に高知空港の拡張による田村遺跡の調査は、かつて高知県では行なわれたことのない大規模な調査であり、広大な面積から新発見を含む多種多様な遺構、遺物を出土している。

今ひとつの大規模開発である四国横断自動車道関係では、基本路線計画決定の後に県教育委員会の手により、昭和48年度に南国市領石～須崎市多の郷間、42km^{註1)}が、昭和51年度には長岡郡大豊町～南国市笠の川間、13.8km^{註2)}の分布調査が行なわれた。これにより発見、確認された遺跡は南国市～須崎市間では124ヶ所、大豊町～南国市間では25ヶ所である。南国市～須崎間は山麓部を通過する計画であり、多くの遺跡が存在するが、大豊町～南国市間は四国山地の中央部を通るので、路線内の遺跡は少なく、南国市領石に建設予定の南国インターチェンジの周辺部にそのほとんどが位置している。

さて、四国横断自動車道の県内工事は、大豊町～南国市間で開始されることとなった。そこで日本道路公団と高知県教育委員会の間で、分布調査の成果に基づき遺跡の取扱いについて協議がなされた。その結果、飼古屋岩陰遺跡、尾谷（八反田）遺跡^{註3)}、牛月古墳の3遺跡が発掘調査の対象となり、記録保存されることになった。当初、公団より昭和54年から昭和56年にかけ調査を行なってほしいとの要請があり、その線にそって調査計画を進めていたが、用地買収の遅れにより、昭和57年度より調査開始となった。57年度は工事工程により、土佐山田町繁藤の飼古屋岩陰遺跡の調査が行なわれた。当遺跡の調査では遺構は発見されなかったが、攜文時代早期の押型文土器を中心として石器300点以上を出土し、多大な成果を上ることができた^{註4)}。

引き続き昭和58年度は南国インターチェンジ内の尾谷遺跡と牛月古墳が調査対象となり、遺跡確認のため、日本道路公団、高速道路策策、土地開発公社、教育委員会の四者により、現地での立会いを行なったところ、牛月古墳はインターチェンジの用地から僅かに外であり現状変更のないことが判明した。したがって、58年度の調査は尾谷遺跡だけとなった。

調査全般に関して、日本道路公団大阪建設局高知工事事務所をはじめとし、関係各機関に協力を受け、南国市教育委員会には作業員の確保など全面的に協力を得ましたので記して感謝いたします。

註1 「四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財調査報告書」昭和48年3月 高知県教育委員会

註2 「四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財調査報告書」昭和52年3月 高知県教育委員会

註3 初当、遺跡名にやや困惑があり、八反田遺跡の名称で調査が開始されたが、後に尾谷遺跡の名称が最適となり変更した。

註4 「飼古屋岩陰遺跡調査報告書」昭和58年3月 日本道路公団・高知県教育委員会



- 3 カタナギリ遺跡 4 下オモダ窯跡 5 才谷寺跡 6 才谷遺跡 7 幸野遺跡
 8 久礼田城跡 9 堂ヤシキ遺跡 A 地点 10 堂ヤシキ遺跡 B 地点 11 岸上遺跡 12 尾谷遺跡
 13 牛月古墳 14 八反田遺跡 15 新城城跡 16 笠の川窯跡 17 長源古墳 18 長
 源遺跡 19 左右山古墳 20 左右山遺跡 21 両城館跡 22 土居遺跡 23 横口道
 路 24 池尻遺跡 25 寺家遺跡

第1図 四国横断自動車道路線内遺跡分布図

II 位置と環境

1 位 置

口ミノヲ谷古墳は、南国市領石字口ミノヲ谷のみかん山北斜面に位置している。南国市は高知県内では最大の平野部である香長平野の大部分を占めており、さらに四国山地の山麓部もその市域の中に収めている。東は物部川を境界線として、吉川村、野市町と接し、北は土佐山田町、西は高知市に接し、南は太平洋に開け、高知県の中央部に位置している。南国市全体の地形をみれば、北部の山間部と南部の平野部の二つの地域に大別できる。

地質的にみれば、北部の山間部は中央構造線の南に広がる外帶に属し、東西に連なる山地からなり、北から南へと、古い地層から新しい地層により形成されている。遺跡の所在している低丘陵のみかん山一帯は白亜紀に属する領石層からなっており、貝類の化石などを出土する地点が知られている。また平野部に点在する独立丘陵である吾岡山、船岡山、陣山、三島山、岡豊山、坂折山、高天ヶ原山、鉢伏山などはペルム紀の高岡層、虚空藏山層からなっている。南部の平野部は物部川の新期扇状地と三角州からなる沖積平野がその大部分を占めており、その北には古期扇状地である長岡台地と国分川の堆積による冲積平野が形成されている。

地形的には北部の山間部は壯年期の地形を呈し、なだらかに高度を下げ平野部に没しており、中小河川により開拓を受けている。平野部は現在の独立丘陵が島となっている多島式内湾を呈していたのを物部川、国分川の堆積作用により現地形が形成されたものである。

遺跡の所在する領石地区は、高松と高知を結ぶ国道32号線が、太平洋側と吉野川水系の分水嶺である根曳峠へと急激に登りはじめる地点であり、比江山などの低丘陵が平野部に張り出している。古墳は、これら低丘陵の末端部の谷間に位置しており、みかん山の北斜面山裾という条件により、谷はゆるやかに東へ開いているが、ほとんど展望はきかず、立地条件としては良好と言えない。

2 歴史的環境

南国市は土佐山田町とともに県内では遺跡の分布密度も高く、大規模な遺跡も多数存在している。やはり物部川により形成された広大な平野と、その豊かな水量による恵みにより、有力な生産基盤となつたのであろう。発見される遺跡のほとんどは弥生時代以降であり、縄文時代の遺跡は少なく、旧石器時代の遺跡は未発見である。しかしながら高樹原1号墳の調査時に石室内の敷石中よりチャート製の細石刃石核が1点出土しており、独立丘陵または山麓部低丘陵上に遺跡の存在が考えられる。

縄文時代の遺跡は低丘陵山麓部に数ヶ所発見されており、いずれも後期と考えられる。また田村遺跡の調査では、標高7~8mの水田下から後期の包含層が発見されており、遺構は伴わないが、沖積平野という立地条件を考えれば注目される。

弥生時代の遺跡は圧倒的に多く、特に物部川の下流域に集中して発見されている。中でも注目されるのは、やはり田村遺跡であり、前期初頭と後期前半の集落および各時期の遺構が発見され、前期から後期まで、弥生時代を通じて中心的な遺跡であることがうかがえる。後期になると長岡台地にも遺



第2図 周辺の遺跡

$$S = 1/50,000$$

第1表 周辺遺跡地名表

番号	名称	備考	番号	名称	備考
1	口ミノヲ谷古墳	発掘調査	31	舟岡山3号墳	現存
2	鯛の骨1,2号墳	消滅	32	タ4号墳	消滅
3	中山田古墳	一部残存	33	井川山1号墳	現存未調査
4	高松	発掘調査	34	タ2号墳	タ
5	城ヶ谷1,2,3号墳	消滅	35	馬背古墳	タ
6	久次西久保古墳	石室残存	36	タ東1号墳	消滅
7	次郎ヶ谷西タ	消滅	37	タ西1号墳	現存未調査
8	田村氏西北方タ	不明	38	丸山古墳	タ
9	三島タ	消滅	39	坂の松タ	石室残存
10	左右山タ	タ	40	宮の谷タ	不明
11	柳ヶ首タ	タ	41	高間原1~11号墳	一部発掘調査
12	庵戸タ	石室残存	42	六郎山古墳	不明
		未調査	43	小奈路タ	石室残存
13	舟岩1~17号墳	発掘調査	44	三ツ塚上古墳	不明
14	狭間古墳	発掘調査	45	タ下古墳	現存
15	藏ノ木タ	石室残存	46	タ中古墳	不明
		未調査	47	狸岩1号墳	消滅
16	米内タ	石室一部残存	48	タ2号墳	タ
17	天神ノ前タ	現存未調査	49	タ3号墳	タ
18	小蓮タ	発掘調査	50	明見彦山1号墳	現存
19	長敏タ	石室残存	51	タ2号墳	消滅
		未調査	52	タ3号墳	現存
20	野津古1,2,3号墳	3号墳現存	53	蒲原古墳	タ
		未調査	54	長源古墳	タ
21	芝の前1,2タ	1号墳現存	55	笠原古墳	タ
		2号墳消滅	56	大塚古墳	タ
22	年越山古墳	不明	57	比江庵寺	
23	年越山1号墳	消滅	58	国衙・周辺遺跡	
24	タ2号墳	タ	59	国分寺・周辺遺跡	
25	折越山古墳	不明	60	獨盡城跡	
26	越戸1号墳	発掘調査			
27	タ2号墳	消滅			
28	吾岡山1,2号墳	タ			
29	舟岡山1号墳	タ			
30	タ2号墳	タ			

跡は分布しており、弥生終末から古墳時代にかけての集落跡が最近の調査で発見されている。

古墳時代の遺跡は数ヶ所発見されているが、断片的資料が多くその全貌はつかめない。しかし、土佐山田町ではヒビノキ遺跡^{註1}が発見されており、良好な資料をううことができる。さて、現在南国市で発見されている古墳の大半は後期古墳であり、6世紀を逆上するものは狭間古墳だけである。この古墳は直径12~13mの円墳であり、主体部は木棺直葬^{註2}と考えられ、副葬品として土師器が出土している。ほぼ同時期の県内の古墳としては、宿毛市の平田曾我山古墳があげられ、時期的には5世紀中葉と考えられるので、現在のところ県内最古の古墳である。また、土佐山田町の大塚古墳とともに県下2例の前方後円墳である。

後期古墳は分布図にみられるように、山麓部と独立丘陵上に多く集中しており、土佐山田町とともに古墳の中心地を形成している。これらの古墳は丘陵単位でまとまるが、分布密度は低く、いわゆる群集墳ではあるが、数基により構成されるものが多い。しかしながら、舟岩古墳群と高間原古墳群については、いずれも20基前後を数え、県内最大級の古墳群を形成している。舟岩古墳群は26基よりなり、発掘調査の結果によれば、6世紀末から7世紀にかけて造営、使用されたものである^{註3}。狭義の高間原古墳群は14基であり、周辺の古墳を含めると25基となる^{註4}。一部発掘調査が行なわれており、やはり6世紀中葉から7世紀後半に位置づけられる。今回調査した口ミノヲ谷古墳の周辺地域にも古墳が点在しているが、いずれも単独、もしくは数基よりなり、密度の高い集中は認められない。領石地区には左右山古墳、領石三の尾古墳が過去に存在していたほかに、ゴーランドの報告の中に3基の古墳の存在が知られる^{註5}。しかしこの中には石室の方向などからみれば、当古墳に該当するものは存在しない。

古墳時代以降の遺跡としては、過去数回にわたる範囲確認調査が行なわれている土佐国衙が知られている^{註6}。時期的には奈良、平安、鎌倉時代にかけての遺構、遺物が発見されており、周辺地域にも広がっている。また、すぐ東方には古代寺院として比江廃寺が存在する。礎石は塔心礎だけが残されており、調査によれば塔基壇は一辺11.6m(38尺)とされている。時期的には複弁連花文、均正忍冬唐草文など法隆寺式の軒丸、軒平瓦を出土しており、県内最古の白鳳時代の寺院である^{註7}。国衙、比江廃寺の西方には国分寺が位置している。当寺の周囲を廻る土壙は創建当時のものと考えられ、その寺域は東西500尺南北450尺とされており、東大寺式の加藍配置である^{註8}。また、その北から西にかけてはやはり奈良から中世にかけての遺物が多く採集されており、土佐国衙とともに古代土佐国の中心地であったのであろう。

さらに西方の岡豊山には、戦国時代の土佐の武将である長宗我部氏が居城として築いた、岡豊城がそびえ立っている。城跡は標高97mを測り、土塁、空濠などの遺構が非常によく残されており、戦国時代の山城の構造をみることができる。

註1 「ヒビノキ遺跡」1977. 3 土佐山田町教育委員会

註2 「南国市史」1979. 10 南国市史によれば粘土敷き組合せ式木棺が3基検出されている。

註3 「舟岩古墳群」1968. 3 高知県教育委員会によれば22基であるが、その後変更があり26基とされている。

註4 高間原古墳周辺の古墳群は高天原古墳群5基、明見郡山古墳群3基、鷹岩古墳群3基である。

註5 「日本古墳文化論」1981. 3 表2日本のドルメンおよび埋葬内の棺No111~114 (P322)

註6 「土佐国衙跡発掘調査報告書」第1~5集 1980~1984 高知県教育委員会

註7 「高知県比江廃寺塔跡」1970. 3 高知県教育委員会

註8 「南国市史」1979. 10 および「土佐国分寺、麻原改築に伴う発掘調査概報」1979. 10

III 調査経過

1 古墳の調査

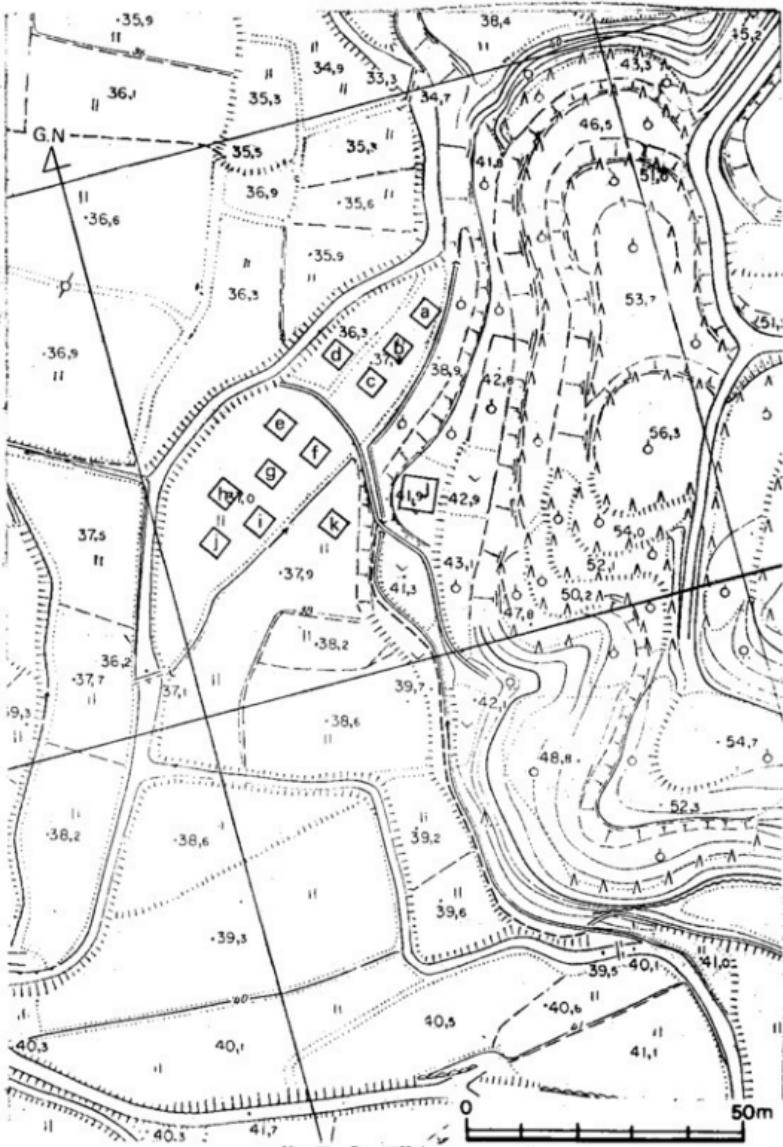
尾谷遺跡の発掘調査は昭和58年11月1日より開始され、古墳の発見などがあり11月30日に終了した。遺跡は小さな谷に所在しており、事前の分布調査により、遺物の採集されている山裾の畑と下面の水田に、それぞれ任意の方向を基準としたグリッドを組み、山裾の畑には 6×6 mのグリッド1個を設定した。グリッドの名称は、水田部のグリッド11個をa～kまで、畑の6mグリッドはLと呼んだ。調査はまずLグリッドから着手した。耕作土を除去した面で不定形のプランを確認、攢乱穴と思われるベルトを残して下げたところ、立石と石積みの一部が現われ、古墳ではないかと堆定された。さらに掘り下げた結果、敷石と思われる石群と、その上面より金環と須恵器片を出土し、石積みも3段まで確認され、古墳と判明した。当初に検出された不整形のプランは、盜掘穴もしくは石室の石材抜取り穴であろう。さらに石室の調査を進めたところ、敷石上からは金環、玉類、須恵器片などが散在して出土、玄室の左袖部では鉄鎌、馬具などの鉄製品が出土した。石室自体は奥壁と側壁のほとんどの石が抜かれており、遺存状態は非常に悪い。蓋道部では玄門寄りの両側から須恵器が集中して出土し、閉塞石も検出され、後世の攢乱はないものと考えられる。また蓋道よりやや谷方向へ延びる墓道状の遺構が発見された。地形測量の後、墳丘の調査にかかったが、開墾のため盛土による墳丘はほとんど認められなかった。

また、石室南側のトレチ(TR4)のセクションに掘り込みがみられたので精査したところ、弥生中期の住居址を検出した。大半は石室構築にさいして破壊されているが、南壁の一部が残されていた。

2 水田部の調査

水田部には 4×4 mのグリッドを11個設定、古墳の調査と並行して行なった。しかし遺構は発見されず、少量の遺物が出土したのみである。層位的には、いずれのグリッドもほぼ同様の層序を示し、I層 耕作土(10cm)、II層 床土(5cm)、III層 灰褐色粘質土(15cm)、IV層 黄褐色粘質土を呈している。このうちIII層中に遺物が含まれており、IV層は基盤の土である。全体的な傾向としては、e～jグリッドはIII層が薄く5cm前後であるが、kグリッドでは厚く20cm前後を測る。特にkグリッドではIII層出土の遺物も多く須恵器の甕片が20数点出土しており、古墳の周溝上より一括出土した甕片に接合している。III層は斜面よりの流れ込み、もしくは客土と考えられる。

なお調査面積は古墳と水田部のグリッド、合計330m²である。



第3図 発掘区設定図

IV 古 墳

1 墳 丘

墳丘の規模は畠の開墾などにより削られ、その原形は明確にできないが、現地形および周溝によりその概略は推定することができる。畠は下面の水田より比高約3mを測り、谷側へ半円形状に張り出している。ある程度の変形を受けているかもしれないが、原地形に近いと考えられ、墳丘の北半分が想定される。南側は山の斜面へ廻る周溝が検出されており、TR-2、3、4にもかかっている。これらをつなぐと石室の開口方向である北西を中心軸として、長径14m短径12mを測るやや橢円形の墳丘をもつ円墳と推定することができる。

墳丘の高さについては、約10cmの耕作土を除いた面に玄門の立石がみられたので、天井石、さらにこれを覆う盛土を考えるならば、現地表面から1m以上の高さが推定され、石室の基底面からは約3~3.5mを測るものと思われる。

墳丘の盛土は、耕作土下に赤ホヤ火山灰と思われる赤褐色土をブロック状に含む黒色の腐植土が5cmほどの厚さで攪乱穴の周辺部にみられ、同じ土が石室掘方の上部まで続いているので、石室を覆う盛土をなしていたと考えられる。また墳丘の北側については、自然地形も利用し、地山を成形することにより墳形を作り出し、盛土を行なったものであろう。

墳丘および掘方の層序は、TR-1、4の断面によれば以下の通りである。

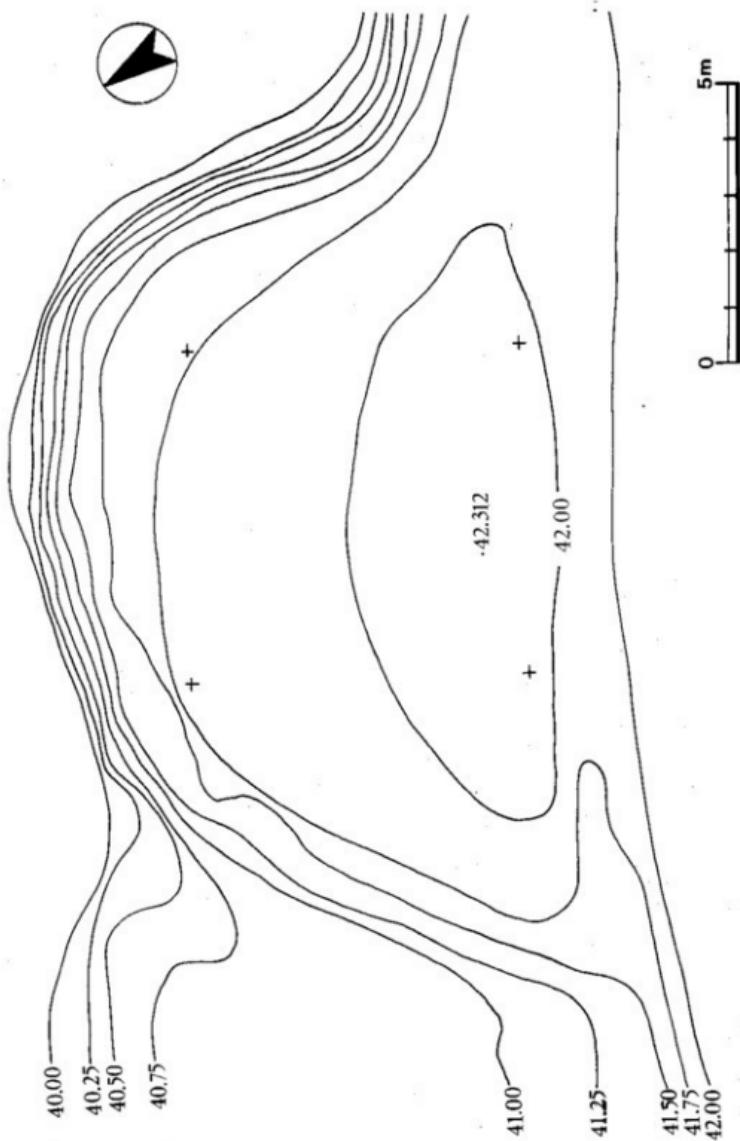
1層 耕作土	2層 明褐色土	3層 暗褐色土	4層 黒褐色土
5層 黒色土	6層 茶褐色土	7層 暗褐色土	8層 明褐色土
9層 明茶褐色土	10層 暗茶褐色土	11層 明黄色土	12層 茶褐色土

これらの層序の中で、2、3層は2次堆積層であり、最下部より近代の陶磁片が出土している。4層は黒色の腐植土をベースとするものであり、5層も同質の土であるが若干の小石を含んでいる。6層は住居址の埋土であり、最下部からは部分的に面をなす炭化物、焼土などが検出されている。7、8、9層は基本土層であり、動いていない。10、11、12層は石室掘方の埋土であり、特に11、12層は石室の基底石を安定させるために、約30cmほど地山と上層の土を交互に築き固められている。

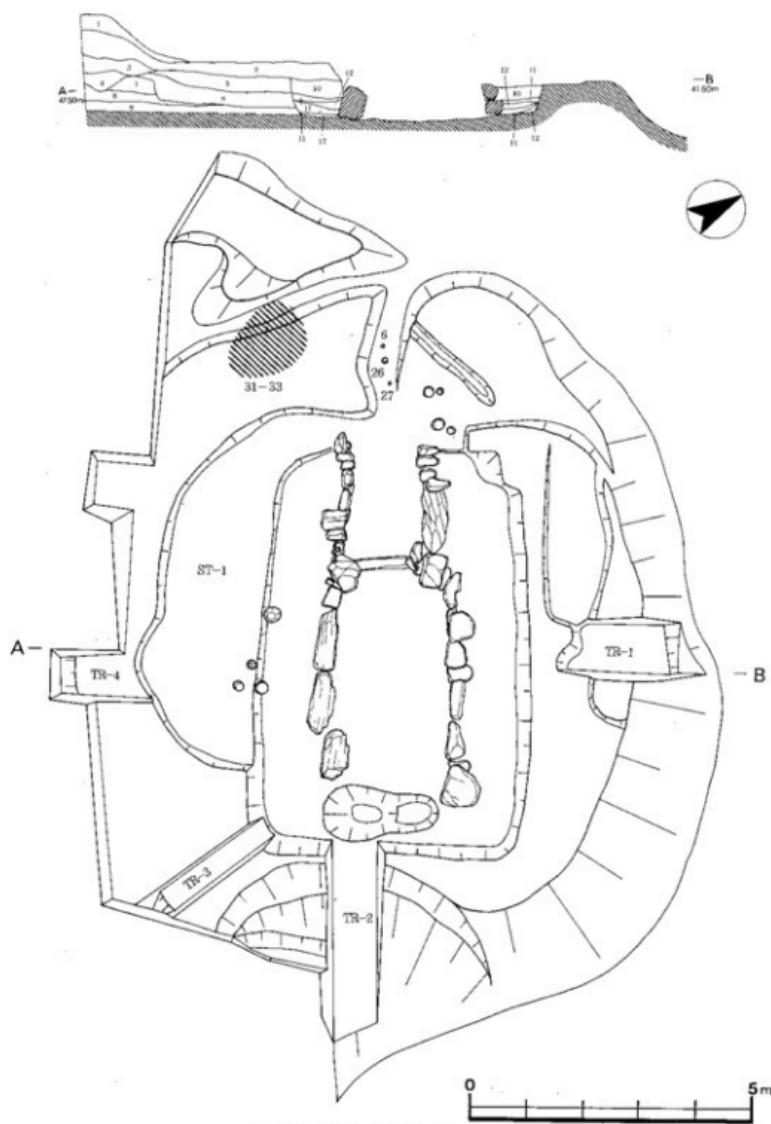
墳丘の外部施設としては、山側を廻り谷側の填掘へ抜ける周溝が検出された。幅50cm、深さ20cmと浅く、排水機能が主たる目的と考えられる。溝内の出土遺物はなく、上面より須恵器片が一括出土している。

2 石 室

石室は両袖式の横穴式石室であり、墳丘の中央部に位置している。開口方向はほぼ北西を示し、N-61°-Wを測る。墳丘の長軸方向と同じであり、斜面に平行する。遺存状態は悪く、天井石と奥壁は完全に抜かれており、側壁も基底石を残す他はほとんど抜き取られている。



第4図 調査前地形測量図



第5図 調査後全体測量図・セクション

石室長は、羨道が2.5m、玄室は奥壁の抜き取り痕まで3.58mを測り、全長6.08mとそれほど長くない。羨道の幅は1.2mと一定しており、玄門は1.05m、玄室は袖部で1.8m、中央部では2.1mを測る。県内の後期古墳の中では、平均的な石室規模と言える。

石室の平面形はほぼ方形を呈し、奥壁の幅は不明であるが、袖部に比べ中央部がやや広く、胴張りをもつと考えられるが、奥壁側へやや開く形態をとるかもしれない。胴張りは、右壁が羨道の石面より40cmほど広くはじめり、緩くカーブするが、左壁は20cmの広がりで、羨道の石面からも直線的なので、より右壁に強く胴張りがなされたものと思われる。羨道は玄室の主軸と同方向であるが、やや西へ振れ、羨道入口ではその度合が強い。

石室の断面形は、残された石材からみれば、右壁の2、3段目の石が内部に張り出しており、持ち送りがかなり顕著になっていたのではないかと推定される。左壁については不明なので左右両壁に同様の持ち送りがみられるのか、右壁だけに強く持ち送りがみられるかについては推定しがたい。

羨道は玄門に接する2個の大型の石材を中心となっている。右壁は長さ1.4mの使用石材中最大の石が基底石として玄門に続き据えられ、羨道入口には40cmほどの河原石を数個、2段に小口積みされている。左壁も1.3mほどの大型石材を右壁同様に据え、20~30cmの石を粗雑に積んでいる。また、羨道入口には30~40cmの河原石を、2~3段乱雑に積んだ閉塞石が検出され、追葬の最終的な閉塞状況を示すと思われる。

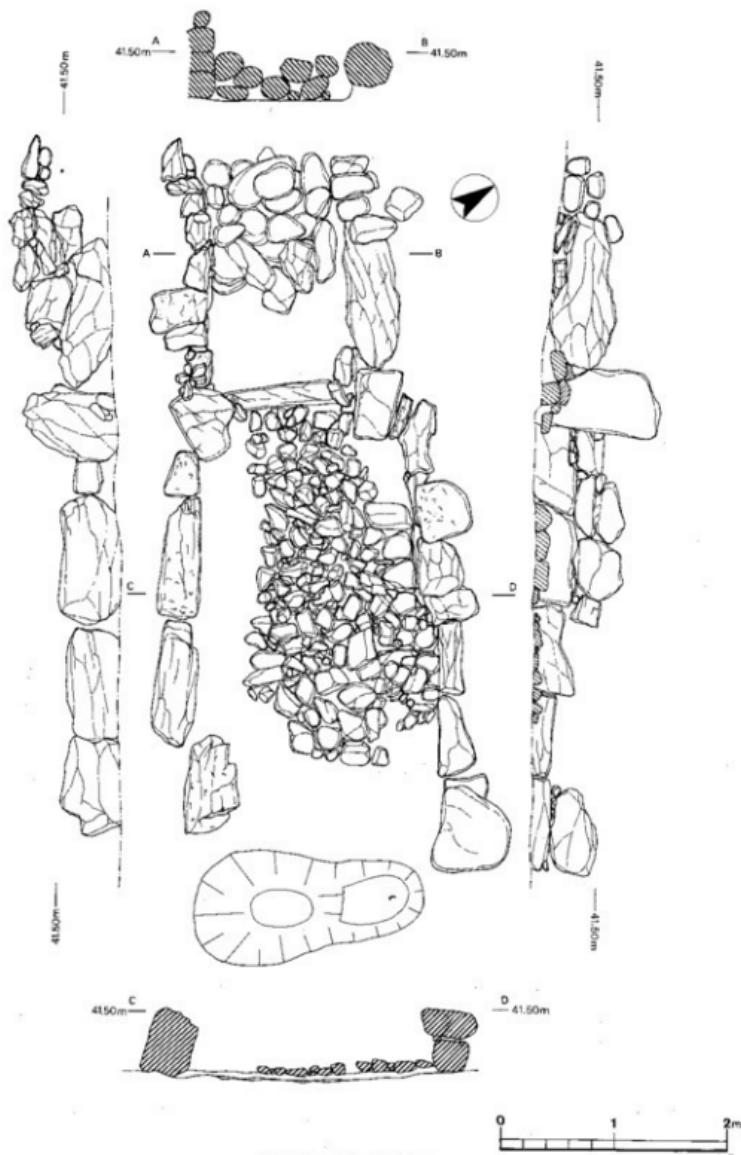
玄門は2個の立石により造られ、右壁側は方形で1.1m、左壁側は不整形で0.9mの高さを測る。右立石は羨道の基底石に石面を揃えるが、左立石は不整形でもあるため羨道石面より張り出している。また玄門には羨道と玄室を区画する幅20cmほどの樋石が据えられている。

玄室右壁は70~80cmを測る方形の石材5個が、基底石として据えられている。基底石の並びは玄門より第2石と第3石の間でややずれがみられ、奥壁側へ若干広がっている。2段目は奥壁側で基底石と同じ大きさの石を積み、玄門側は50cm前後のやや小型の石材が積まれている。高さは床面より約80cmに揃えられ、一部には3段目が積まれる。左壁は1m前後の基底石が3個残されるが、奥壁側の基底石は大きく玄室内へ動いている。他の2個はほぼ原位置を保つと思われるが、やはり玄室内へ傾いており、やや動いている可能性がある。また玄門との間は40cmほどの小型石材で埋められている。左壁は基底石しか残されていないので、石積みの状態は不明であるが、北壁同様やや小型の石材により、石間に小隙を詰めながら積まれたと思われる。

奥壁は抜き取り痕からみれば大小2個の石材により築かれていたと考えられる。

使用される石材は全体的に小型で、加工痕もなく、自然石である。石質は硅岩が2点みられる他はすべて礫石であり、背後のみかん山周辺から容易に入手することができる。

玄室の床面には、玄門から中央部と右壁にかけて敷石が残されていた。敷石は10~20cmの扁平な礫を敷き、その間を小礫で埋めている。右袖部だけは30cmほどの扁平礫で仕切られた、敷石のみられない部分があり、意識的に作り出されたものと思われる。左壁と奥壁にかけては、床面から浮いた状態で敷石が散在しており、石材抜き取り時に攪乱されている。当初は床面全面に敷石がなされていたと考



第6図 石室実測図

えられ、左袖部が右袖部と同様であるならば、両袖部にかぎり敷石がなされず、特定の機能をもつたと考えられる。

敷石下には灰色の粘土を若干混ぜた黄褐色の粘質土が5cmほどの厚さでみられ、床面上に粘土を敷き、敷石を安定させている。敷石と粘土を除去した面は地山であり、排水溝などの施設は検出されず、奥壁側へ若干の傾斜がみられた。また床面は作り直した痕跡などもみられず、一面だけなので、追葬にあたっても、当初の床面が使用されたと思われる。

羨道も地山を床面とし、玄門への傾斜がみられる。しかし、羨道入口への排水溝などの施設は検出されなかった。なお羨道と玄室の床面は框石により10cmほどの段差をもち玄室が低くなっている。

羨道に続き、羨門より40cmほど離れた墓道状の遺構が検出された。幅30~40cm、深さ15cmほど地山を掘り込んでおり、羨道の中心線上から始まり、やや北へ曲りつつ0.9mほど伸び、墳丘の袖部と周溝につながる。規模からみれば短かく、墳丘外へのつながりも明確でないので、排水溝的な機能をもつのではないかとも考えられたが、羨道外から始まり、レベル的にも玄室、羨道の排水は不可能な点をみれば、やはり墓道の一部をなすものであろう。

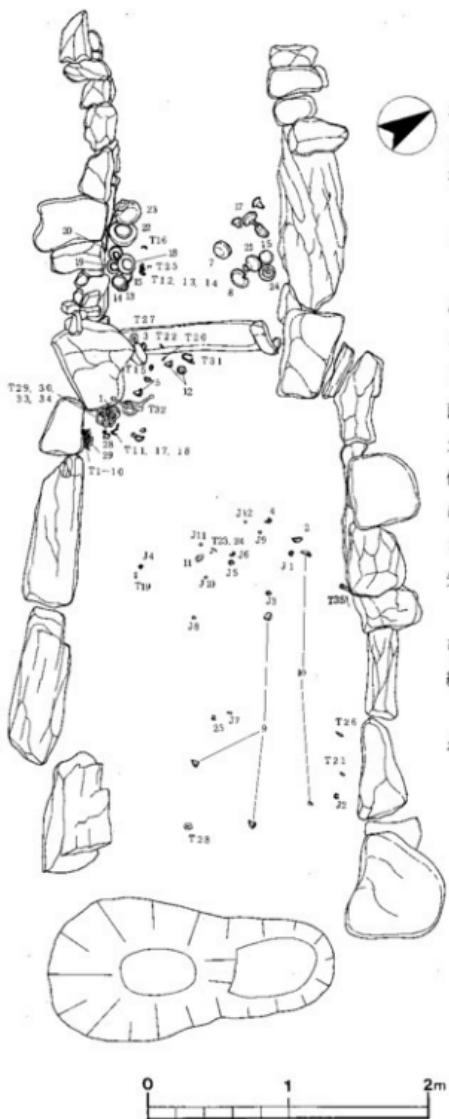
石室の掘方には方形で、羨道入口から奥壁抜き取り痕裏まで長辺7.3m、短辺は羨道側で4.5m、奥壁側で5mを測り、やや開いている。深さは地山掘り込み面から60cmであり、石積みとの間隔は1mを測る。掘方底面は平坦であり、石室床面と同じ高さである。石室を構築するにあたっては、玄室部を一段低く掘り下げ、基底石を据えているが、いずれの基底石も格別、床面に掘り込みはみられない。基底石の裏には、地山と上層の土を交互に30cmほど築固め、安定をはかっている。2段目からは、石積みを行ないながら黒色雑植土を入れ、盛土に統けていくものである。掘方自体は石室に比べ大きく造られている。また石室が斜面に平行に造られるためであろうか、右壁に強く崩張りが残されており、側壁の持ち送りも右壁が顕著にみられるものであれば、右壁により、斜面からの土圧などを支える構造をもっていたのではないかと考えられる。

3 遺物の出土状態

玄室の遺物出土状態は、盗掘、石材抜取りなどの擾乱状態を示しており、かなり散在している。奥壁および左壁付近では遺物は出土せず、中央部と右壁により多く出土している。中央部では玉類がかなり集中しており、他に金環4点、釘、須恵器片などが出土している。右壁側では金環1点、刀子、基底石間に入り込み鉄鋒が1点出土している。

左袖部では鉄製品が集中し出土している。やや上面からは、馬具の兵庫鎖などがひとかたまりとなり、須恵器の小壺とともに出土し、下面よりは轡が出土している。また基底石と浮いた敷石にはさまれ、土師器の甕片と鉄錆10本が一括出土した。玄門付近にも鏃などの鉄製品と須恵器片などが散発的に出土しており、盗掘などにより擾乱され、左袖部へ集められたものであろう。

羨道では玄門前の左右両壁から完形の須恵器が一括出土している。右壁では杯、高杯、壺が、左壁では杯、短頸壺、台付直口壺、提瓶などが出土しており、閉塞石の状態からみても原位置を保つものと考えられる。



第7図 遺物出土平面図

墓道では杯、提瓶、魁が、やや浮いた状態で出土し、周溝の上面では杯、壺、甕などが細片となり出土しており、盗掘時に石室内から抜き取り、墳丘外へ一括放置されたものであろう。

4 弥生住居址

弥生の住居址は石室の掘方の調査中にトレンチのセクションにより発見された。黒褐色土と地山を一部掘り込む竪穴住居址であり、復元直径約8mの円形と推定される。壁高は約30cmを測り、南壁側がすほどよく残されている。埋土は黒褐色土であり、小石をやや多く含む。住居址内には数個のピットが検出されているが、ほとんどは石室により壊されており詳細は不明である。床面の残された部分には炭化物と焼土の集中がみられ、焼失家屋とも考えられる。

出土遺物は細片となっており、石室掘方、および埋土中から散発的に出土した。また石器として緑色チャートの石鏃が1点出土している。

時期的には出土遺物から弥生中期中葉と考えられる。

V 出土遺物

出土遺物は須恵器、土師器、鉄製品として馬具、鉄鎌、鉄鉤、釘、飾金具、装身具は金環と玉類である。他に弥生土器と石鏃、中世の土師質土器が出土している。

1 土器（第10図～12図）

土器は土師器の甕を除きすべて須恵器である。

(1) 須恵器

玄室からは破片も含め杯蓋5点（1～5）、杯身3点（9～11）、短頸壺片1点（25）、小形壺（28）、の他器形不明の破片が若干出土するのみであり、出土点数は少ない。これに比べ美道からは杯蓋2点（7、8）、杯身4点（12～15）、短頸壺2点（18、19）、直口壺2点（20、21）、台付直口壺（22）、提瓶（26）、細頸壺（24）、無蓋高杯（17）が出土しており、完形品も多い。墓道よりは杯蓋（6）、提瓶（26）、甕（27）の3点が、周溝上面からは杯身（16）、台付直口壺（30）、直口壺（31）、壺2点（32、33）が出土している。

杯蓋の直径は12～13cmとほぼ同径であるが、4はやや小型で11.4cmである。天井部は丸味をおびるか平坦であり、口縁部との陵は不明瞭である。口縁端部は丸くおさめ、全体的に浅く、ヘラ削りの範囲は狭い。5の口縁端部は外へ張り出す特異な形態をとる。

杯身は口径14cmほどの大型（9、10）と12cm前後の小型の2種がみられる。全体的に器高は低く浅い。立上りも低く、内傾し、受部も小さく、ほぼ水平かやや上方へ作り出されている。底部はほとんど平坦であり、ヘラ削りの幅は狭く、ほとんど未調査の底部をもつもの（12、13、15）もある。杯蓋と身が確実にセットになるものではなく、蓋に比べ身は小型なものが多い。

無蓋高杯は長脚2段透しをもち、4点に割れ出土している。

壺は短頸壺、直口壺、細頸壺がみられる。美道出土の短頸壺18はよく張った肩部をもち、19はやや小型で扁平となる。玄室出土の25は口縁部の破片であり、同じ器形をもつ。直口壺の21、22は同様の器形をもち、丸く張る肩部に短かくやや外反する口縁部である。20も外反する口縁をもち、30も同じ口縁部に強く肩の張る肩部に短脚が付く。22もやや大型の台付直口壺であり、脚部には3ヶ所に円孔がみられ、肩がよく張っている。24は口縁部をまったく欠くが細頸壺であろう。28は完形の小型壺である。

提瓶は2点ともに背面が丸く張っている。23はやや大型で口縁部は外反し、取手もしっかりしている。24は小型となり口縁を欠き、取手は退化している。

甕は27の1点だけであり、下肩部だけの破片であり円孔の一部がみられる。

甕は中型であり、外面にタタキ目とカキ目、内面には同心円文がみられるが、口縁部の作りには違いをみせる。

時期的には、杯からみれば6C末から7C中頃までと考えられ、高杯、提瓶などもこの時期を認められるものである。

(2) 土器

土器としては、甕が1点鉄錆と一括出土しただけである。口縁部の破片であり、外面には荒いハケ目、内面にはヘラ削りがみられる。

2 鉄製品（第13図～14図）

鉄製品には馬具、鉄錆、鐔、鉄鉢、刀子、釘、飾金具などの他に若干の不明品があり、大半は左袖部を中心として出土している。

(1) 馬 具

【轡】引手、鏡板、銜が一塊となり出土した。銜はよくみられる二連式のもので、8cmの丸棒の両端に環を作り出し接合、鏡板と引手につながる。引手は13cmを測り、一端は銜に直結し他端の環は外へ曲げられている。鏡板は内径6.5×5.0cmのやや楕円形の素環であり、長方形の立闇がつけられている。引手と同じく銜の環につながれる。外面には一部に細い銅線状のものがつけられており、なんらかの装飾がなされていたかもしない。使用される鉄棒は直径8mm前後を測り、全体に簡素な作りである。残存状態は良好であった。

【鐔】鉗具、兵庫鎖、鎧をつなぐ釣手などが出土しており、鎧本体は発見されなかった。T29は鉗具とそれに接合する兵庫鎖1個である。鉗具は丸棒の一端を丸く曲げ刺金を巻付け、他方は直線に曲げる。兵庫鎖は丸棒を2重に折り曲げ、両端は直角に角度をずらし環を作り出している。鉗具は8cm、兵庫鎖は10cmを測る。T30は兵庫鎖と鎧の取付け部である釣手が接合するものである。兵庫鎖は2個つながれており、作りはT29と同様であるが、環が緩く、中間部もあまり締められていない。兵庫鎖の上部には一端を直線に折り曲げた環が付き、鉗具ではないかと思われるが、刺金は残っていない。下部にはU字形を開いた釣手が付いている。釣手は下部を平端とし、両側ともに外面より釘が打たれ、内面には釘とともに木質が若干みられる。兵庫鎖は10cm、上部の鉗具と思われる環は9.5cm、釣手は5.6cmを測る。T31は釣手であり、T30の釣手と一对になるものと考えられる。形態的には同じで、やや開くU字形であり、下部を平端とし、両側外面から釘が打たれ、先端部には木質がみられる。全長8cmを測る。T29～31の形態からみれば、鎧本体は三角錐形の木心鉄納張壺鎧と考えられ、T30のように上部の環が鉗具であるならば、兵庫鎖が2連ときわめて短かく作られているのが特徴であり、革帶などにより鞍に接合されていたものと思われる。T33、34はT30の兵庫鎖の一部である。

【鉗具・飾金具】T16は小形の鉗具と思われ、一端を丸く他方は直線に曲げている。T17、18、20、22は刺金ではないかと考えられ、T17の一端は薄くされ丸く曲げられる。T12は直径2.3cmの円形座金をもつ飾金具であり、半球の大きな頭部をもち、先端部はやや曲がる。座金部に金銅の残片がみられることから、鉄芯金銅張りであったことが判明した。T13、14は、ほぼ同じ大きさの飾金具で、一端を緩くカーブさせ、やや頭部の大きい鉗を2個、打ちつけている。T15はT13、14と同じ形をとるが、やや大型であり、3個の鉗が打たれている。鉗の先端には木質が若干みられる。これらの飾金具は出土状態からみれば、馬具以外のものに使われた可能性も考えられる。他にT19、21は扁平で太く、

馬具に關係するものかもしれないが、不明である。

(2) 武具

武具は鉄鎌11点、鉄鋒1点、銅2点が出土している。

〔鉄鎌〕 上飾器の甕とともに10点が一括して出土した他に、茎部が1点遊離して出土した。全長はT1の完形品からみれば10cm前後と思われ、茎部に木質が付着するものが6点ある。形式はいずれも平根式であり、三角形は4点、腹状形3点、柳葉形3点の3種類のタイプがみられる。遺存状態は良好である。

〔鉄鋒〕 鉄鋒T35は頭部が基底石間に入り出土した。全長は20cmを測り、下から7cmまで袋状をなし、口径は3cmを測る。中間部から頭部の断面は方形であり、先端部はしだいに薄くなり、ノミ状の平刃となる。刃部は幅1cmを測り、袋部内には木柄と思われる木質がかなり残されている。

〔銅〕 銅製の平板からなる簡素なもので、T27、28の2点である。ともに7×6cmと同じ大きさであり、卵形をしている。刀穴も同じく卵形であり、2×3cmを測る。T27は玄門部、T28は奥壁に近い位置で出土しており、かなり動いている。また刀身は破片すら出土していないが、少なくとも2本の存在は考えられる。

(3) その他

〔刀子〕 T26の刀子は非常に小形であり、刃部4cm、柄部1.5cm、全長5.5cmである。先端を若干欠き、柄部も欠損している。

〔釘〕 玄室より2点出土している。断面は3mmの方形で細く、2点とも中間部から曲っている。頭部は扁平につぶされ、平頭とされている。T23は完形で全長6cm、T24は先端を欠き2cmを測る小型の釘であることを考えれば、木棺以外のものに使用されていた可能性が高い。

〔鍵〕 T25は鍵と考えられ、一端を欠いている。断面はやはり3mmの方形で細く、全長4cm、足は1cmを測り、小型であることから、釘同様、木棺以外の使用を考えられる。

3 装身具(第8図)

装身具は金環と玉類として勾玉、管玉、丸玉、貝玉が玄室より出土している。

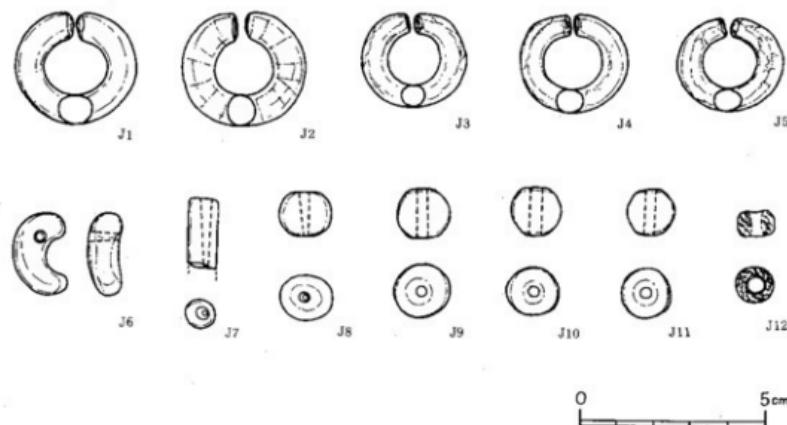
(1) 金環(j1~5)

金環は玄室内から散在して出土し、確実にセットになるものはなかったが、大きさからみればJ3、4がセットと考えられ、5個で4人分となる。J1は金張りが非常によく残るが、他の金環はあまり残らず、J4、5はほとんどはげている。またJ2には何本かの筋となる色調の違いがあり、金環に何かまいていたものかもしれない。

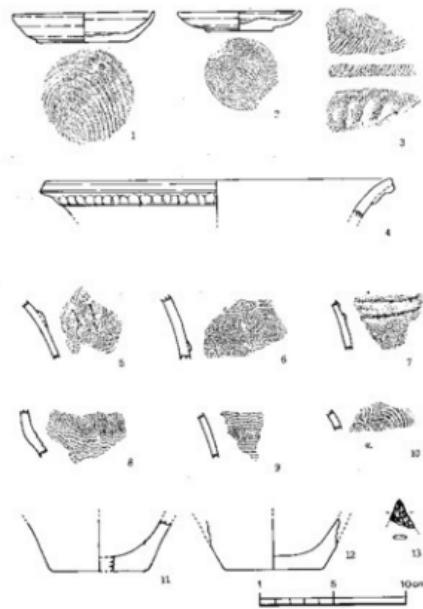
(2) 玉類(j6~12)

〔勾玉〕 半透明な淡青緑色を呈す碧玉製であり、やや小型である。穿穴は一方からなされ、一方が細くなっている。

〔管玉〕 不透明な淡緑色であり、凝灰岩製ではないかと思われる。一端を欠き、穿穴はやはり一方からであり、折口の穴は非常に細い。



第8図 出土遺物(1) 装飾品



第9図 出土遺物(2) 弥生・土師質土器

〔丸玉〕 濃緑色の碧玉製とガラス製の2種がみられる。碧玉製はやや扁平であり、勾玉、管玉同様に一方向からの穿穴がされている。ガラス製は濃青色と淡緑色の2色のガラスが縞状に混り合うものである。

〔貝玉〕 小型の貝製の玉であり、巻貝を利用していると思われるが、磨耗しており詳細は不明である。

4 弥生土器・土師質土器（第9図）

弥生土器は住居址を中心として、石室掘方、埋土中から出土しており、すべて細片である。3、4は口縁部であり、外面に粘土の貼付けがみられ、3の端部には細かい簾状文が施される。5～10は脚部の破片であり、5～7には細い貼付け凸縁と柳描直線文、波状文が8～10にも同じく直線文と波状文がみられる。11、12は底部で平底からゆるやかに開く。13は良賀のチャート製の石鐵であり、脚部を欠いている。1、2は土師質の杯であり、底部には糸切り痕が明晰に残り、内面にはロクロ目が残される。1は石室の埋土中、2は玄門の下部から出土しており、盜掘の時期を中世とみることができよう。

VII まとめ

口ミノヲ谷古墳は両袖式の横穴式石室をもっている。墳丘はほとんど残されていなかったが、12～14mの円墳である。時期的には後期古墳である。県内の古墳は後期古墳が中心であり、その中でも墳丘、石室ともに平均的なもので、特に変った形態はみられない。

立地は北斜面であり、さらに谷の奥側である北西に開口する点はあまり他の古墳にみられないが、北西に開口する点だけであれば、数基の例をあげることができる。墳丘以外の施設として墓道が発見されており、県内では最初の例である。

古墳の年代は出土した須恵器よりみれば6世紀末から7世紀中葉まで考えられる。杯身の9・10などは古く、壺瓶23・高杯17などと共に陶色のTK43に並行、杯身12・13・14、壺瓶26などはTK209に該当するものと考えられ7世紀前半である。金環などからみれば4人以上の被葬者が考えられ、6世紀末の造築から7世紀にかけての数回の追葬が想定され、出土須恵器からも認められる。最終時期はつまみをもつ杯蓋は出土しないので、やはり7世紀中葉までには追葬も終了したと考える。

出土遺物は、石室の破壊度からみれば、よく残されていた。特に墓道には一括出土の須恵器があり、最終追葬時の状況を現わしていると思われ、時期的に差のあるものが混在するので、追葬に際して、墓道両脇に取りかたづけられたものであろう。

鉄製品としては馬具の出土が注目される。特に鎧はその本体はみられないが、一対となる釣手、鞍具、兵庫鎖などから存在は明確であり、現在知られている古墳では初めての出土例である。鎧が存在するのであれば、当然ながら鞍の存在も想定されるが、出土品の中には鞍と推定できるものはなく、盜掘により抜き取られたか、革製などの腐蝕しやすい素材により作られていると思われる。また雲珠、杏葉、辻金具などの装飾馬具は断片すら出土しないところをみれば、当初より副葬品ではなく、柳も装飾性のない、いたって簡素な鉄製素環の鏡板をもつものでないので、生前に常用していた、実用的な馬具一式が副葬されたものであろう。

他の鉄製品として鎧が2点出土しており、直刀が最低2本は副葬されていたことがうかがえる。また鉄鎌は11本出土するが、すべて平根式で後期に大量に副葬される尖根式の鉄鎌はみられない。また鉄鉤としたものの先端部はノミ状となり、断面も方形なので工具的なものではないかとも考えられた

が、類例が存在することもあり鉄錐とした。

玉類の出土数は少なく盗掘のためと考えられるが、丸玉、勾玉は玄室内中央部にほぼ集中しており、原位置をうかがうことができる。

当古墳の被葬者は、古墳自体の規模、副葬品からみても、高知県下の後期古墳としては平均的なものであり、実用的な馬具の副葬などを考えれば、国分川流域を開発し、基盤とした、軍事的性格も持った存地農業經營者の家父長墓ではないかと考えられる。また、ゴーランドの記録により、位置は不明であるが、領石に3基の古墳の存在が知られ、背後のみかん山造成時に遺物が出土したという話もあるので、4基以上からなる古墳群としてとらえることができ、領石一円を共通基盤とする被葬者達の存在が考えられる。

参考文献

- 日本の考古学Ⅳ 1974
高知県の考古学 1966
南国市史上 1979 南国市
高知の研究Ⅰ 1983
高知県文化財調査報告書 第14集 1964 高知県教育委員会
△ 第15集 1968 高知県舟岩古墳群
陶邑古窯址群Ⅰ 1966 平安学園考古クラブ
天理市石上・豊田古墳群Ⅰ 1975 楠原考古学研究所
平群・三里古墳 1977 △
桜井市外鍬山北麓古墳群 1978 △
岩田古墳群 1976 岡山県山陽町教育委員会
世界考古学大系3日本Ⅲ 1975
高知県史考古編 1968 高知県
土佐山田町史 1979 土佐山田町

第2表 須恵器観察表

番号	器種	法量cm	形態	手法	備考
1	杯 蓋	口 径13.4 器 高3.6	天井部と口縁部の稜はほ とんどなく、口縁端部は丸くおさめる。	天井部右回転ヘラ削り。 口縁から内面は回転ナデ 調整。	胎土・焼成良好、青灰色。 天井部にノの字の ヘラ記号有り。完形
2	杯 蓋	口 径11.4 器 高3.5	天井部は平坦、口縁部の 稜はなく丸味をおびる。 口縁部は短かく、薄く終 る。	天井部左回転ヘラ削り。 口縁から内面は回転ナデ 調整。	胎土・焼成良好、青灰色。 約半個体
3	杯 蓋	口 径12.0 器 高3.4	天井部を欠くが、口縁部 へ丸くつながる。口縁部 は薄く終る。	天井部には回転ヘラ削り がみられるが、回転方向 は不明。口縁から内面は 回転ナデ調整。	胎土に若干砂粒を含 む。焼成良好、青灰色。 1/4個体
4	杯 蓋	口 径12.5 器 高2.7	天井部を欠くが、口縁部 へ丸くつながる。口縁端 部は特に薄く、内面に若干 干ふくらむ。	口縁部、内面ともにてい ないな回転ナデ調整。	胎土・焼成良好、灰白色。 口縁部の破片
5	杯 蓋	口 径12.7 器 高4.2	天井部は丸く、口縁部へ 続く。口縁端部は外へ強 く張り出す。	天井部右回転ヘラ削り。 口縁から内面は回転ナデ 調整。	胎土に若干砂粒を含 む。焼成良好、青灰色。 天井部に自然釉がかかる。 ほぼ完形
6	杯 蓋	口 径13.0 器 高3.9	天井部と口縁部問には浅 い沈線が入るが明確な稜 はなさない。口縁部はか なり直立する。	天井部右回転ヘラ削り。 口縁から内面は中心を残 し回転ナデ調整。	胎土良好、焼成も良好 だが、やや軟質である。 青灰色。完形
7	杯 蓋	口 径12.7 器 高3.7	天井部と口縁部の稜はな く、丸い。器厚は薄く、 特に口縁端部は薄く、シャ ープに終る。	天井部右回転ヘラ削り。 口縁から内面は中心を残 し回転ナデ調整。	胎土に若干の砂粒を含 む。焼成良好、青灰色。 完形
8	杯 蓋	口 径13.4 器 高3.8	天井部は平坦であり緩か に口縁部に続く。口縁端 部は丸く終り、内面に小 段がみられる。	天井部右回転ヘラ削り。 口縁から内面は回転ナデ 調整。	胎土良好、焼成も良好 だが、やや軟質。黄灰色。 完形
9	杯 身	受部径14.3 口 径12.2 器 高4.0	平坦な底部より緩かに立 上り、浅い。受部は短か くやや上を向く。立上り は厚く、内傾する。	底部右回転ヘラ削り。内 外ともに回転ナデ調整。	胎土・焼成良好、淡黄 灰色。3/4個体
10	杯 身	受部径14.2 口 径12.3 器 高3.4	平坦な底部よりやや直線 的に立上る。受部は短か くやや上を向く。立上り は薄く、内傾する。	底部右回転ヘラ削り。内 面、受部回転ナデ調整。	胎土に砂粒を含む。燒 成良好 青灰色。1/3個 体

第2表 痛 悪 器 観 察 表

番号	器種	法量cm	形態	手 法	備考
11	杯身	受部径12.7 口 径10.2 器 高4.0	小型の杯であり、丸味をおびた底部より、緩かに立上る。受部は短かく水平にのび丸く終る。	底部右回転ヘラ削り。内、外面回転ナデ調整。	胎土に砂粒を含む。焼成良好、青灰色。1/4個体
12	杯身	受部径12.0 口 径9.6 器 高3.2	平坦な底部より直線的に立上る。受部は短かくやや上を向き、立上りも薄く、内傾する。	底部未調整、底部に続く体部を右回転ヘラ削り。内面にロクロ目を残し、回転ナデ調整。	胎土・焼成良好、灰白色。完形
13	杯身	受部径13.2 口 径11.0 器 高3.6	平底より、やや外反ぎみに立上る。受部は薄く、水平にのび、シャープである。立上りは直立ぎみであり、高い。	底部は右回転ヘラ削り。内外面ともに回転ナデ調整、内面中心はナデおさえ。	胎土・焼成良好、青灰色。完形
14	杯身	受部径12.1 口 径10.2 器 高3.3	平底より直線的に立上る。受部は低く厚い。立上りも低く内傾する。	底部は未調整と思われるが、焼成が悪く不明。	胎土に砂粒を含む。焼成は不良、白灰色。完形
15	杯身	受部径12.0 口 径9.6 器 高3.2	平底より丸味をおび立上る。受部は短かく水平にのび丸く終る。立上りは低く、やや直立ぎみである。	底部は未調整。ヘラ削りはみられず内外面ナデ削り。内面にロクロ目を残す。	胎土に少量の砂粒を含む。焼成良好、青灰色。完形
16	杯身	受部径12.6 口 径10.2 器 高4.2	丸味をおびた底部より緩かに立上る。受部は短かく、やや上向きにのび、丸く終る。立上りも内傾し、丸く終る。	底部ヘラ削り。内外面ナデ調整。	胎土・焼成良好、青灰色。ほぼ完形
17	無蓋高杯	口 径6.5 器 高8.4 脚 高5.9	杯部は底部より緩かに立上り2条の段状沈線がみられる。口縁部は直立し、丸く終る。脚部は方形の2段透しがみられ、透し間に2条、下段透し下に1条の沈線がみられる。	杯部は底部右回転ヘラ削り、内外面および、脚部は回転ナデ調整。	胎土・焼成良好、青灰色。杯部内面に自然釉かかる。4個に割れ出土。完形
18	短頸壺	口 径8.4 最大径14.4 器 高10.2	やや肩の張る丸い胴部をもち、口縁部は短かく直立する。	下脚部に右回転ヘラ削り。内面にロクロ目を残し、ナデ調整。	胎土・焼成良好、白灰色。全体に自然釉がある。完形
19	短頸壺	口 径7.2 最大径12.6 器 高8.0	やや平坦な底部より丸く張る胴部をもつ。18に比べやや扁平であり、口縁は短かく直立する。	下脚部に右回転ヘラ削り。やや粗いナデ調整。	胎土・焼成良好、白灰色。完形

第2表 須恵器観察表

番号	器種	法量 cm	形態	手法	備考
20	直口壺	口 径6.9 最大径12.0 器 高12.6	やや丸味をおびた平底に肩の張る脣部をもつ。口縁部はやや外反してひらく。口頭部に浅い2条の沈線がみられる。	下脚部は回転ヘラ削りだが、回転方向は不明。ナデ調整の他に内面底部に円形工具の刺突調整痕がみられる。	胎土・焼成良好、青灰色。口縁部を欠損。
21	直口壺	口 径7.0 最大径14.0 器 高13.0	球形の脣部に緩かに外反する口縁部をもつ。口縁端部は丸くおさめる。	下脚部に右回転ヘラ削り。口縁部、外面はていねいなナデ調整。	胎土・焼成良好、灰白色。肩部に自然釉がかかる。底部に×のヘラ記号有り。完形
22	合付直口 壺	口 径10.8 最大径19.6 器 高18.6	外反する短脚に肩の張る脣部をもつ。口縁部は広く直立する。肩部にヘラの短かい直線文が浅くみられ、脚部には3個の円孔がみられる。	下脚部に右回転ヘラ削り。口縁部外面ナデ調整。	胎土にやや多く砂粒を含む。焼成良好、青灰～灰白色。完形
23	提 瓶	口 径9.8 最大径17.8 器 高21.0	正面、背面ともに丸く張る。口縁部は強く外反し、端部は丸く終る。肩部にはへの字状の取手がみられる。	背面は右回転ヘラ削りの後、カキ目を施す。正面にもカキ目が施され、中心に×のカキ目がみられる。口縁部はナデ調整。	胎土・焼成良好、青灰色。完形
24	細頭壺	頭 径4.0 最大径12.8 器 高8.0	不整形の平底に肩の張る脣部をもつ。肩部には斜行格子文がみられる。	底部はヘラ削り。外面ナデ調整。	胎土・焼成良好、青灰色。肩部に自然釉がかかる。口縁部欠損。
25	短頭壺	口 径9.6 最大径15.2	やや内傾した口縁をもつ。	内・外面にナデ調整。	胎土・焼成良好。口縁部を除き自然釉かかる。口縁部破片
26	提 瓶	口 径3.8 最大径13.6 器 高16.2	正面、背面ともに丸く張る。口縁部は外反するが端部を欠く。肩部の取手は扁平となる。	背面は右回転ヘラ削りのままであり、正面は細かいカキ目が施される。口縁部はナデ調整。	胎土・焼成良好、赤青灰色。口縁を欠くが完形
27	瓦	最大径9.2 器 高6.4	下脚部のみであり、わずかに円孔の一部が残る。円孔の上端にかかり、浅い沈線が1条みられる。	底部はヘラ削り。やや机いナデ調整。	胎土・焼成良好、白灰色。下脚部破片
28	直口壺	口 径4.0 最大径7.6 器 高8.8	小型の直口壺であり、最大径を中心にもつよく張った脣部に直立する口縁部をもつ。下脚部には焼ゆがみがみられる。	下脚部ヘラ削り。上脚部にカキ目が施され、口縁部は回転ナデ調整。	胎土・焼成良好、赤褐色。完形

第2表 須恵器観察表

番号	器種	法量 cm	形態	手法	備考
30	合付直口壺	口径5.8 最大径16.0 器高18.0	短かい脚部によく肩の張った肩部をもつ。口縁部は直立し、外反する。頸部と肩部に2条の浅い沈線がめぐる。	下腹部右回転ヘラ削り。 回転ナダ調整。	胎土・焼成良好、灰褐色。全体に自然釉かかること。口縁部を欠く。
31	直口壺	口径14.0 最大径18.0 器高16.4	球形の肩部に広く、緩やかに外反する口縁部をもつ。口縁端部は丸くおさめる。	下腹部は粗い右回転ヘラ削り。口縁部はナダ調整。	胎土に砂粒を含む。焼成良好、青灰色。完形
32	甕	口径22.0 現存器高 19.8	肩はよく張り、口縁部はくの字状に屈曲し外反する。口縁端部はするどく内面へ張り出し終る。	外面は平行タタキ目の上に細かいカキ目を施す。 内面は同心円文がみられる。	胎土・焼成良好、明灰色。
33	甕	口径17.4 最大径40.0 現存器高 27.0	球形に近い肩部をもち、口縁部は緩やかに直立する。口縁端部はやや外反して終る。	外面は平行タタキ目の上にカキ目を施し内面は同心円文がみられる。	胎土・焼成良好、青灰色。

第3表 鉄鎌計測表

(単位はcm. g)

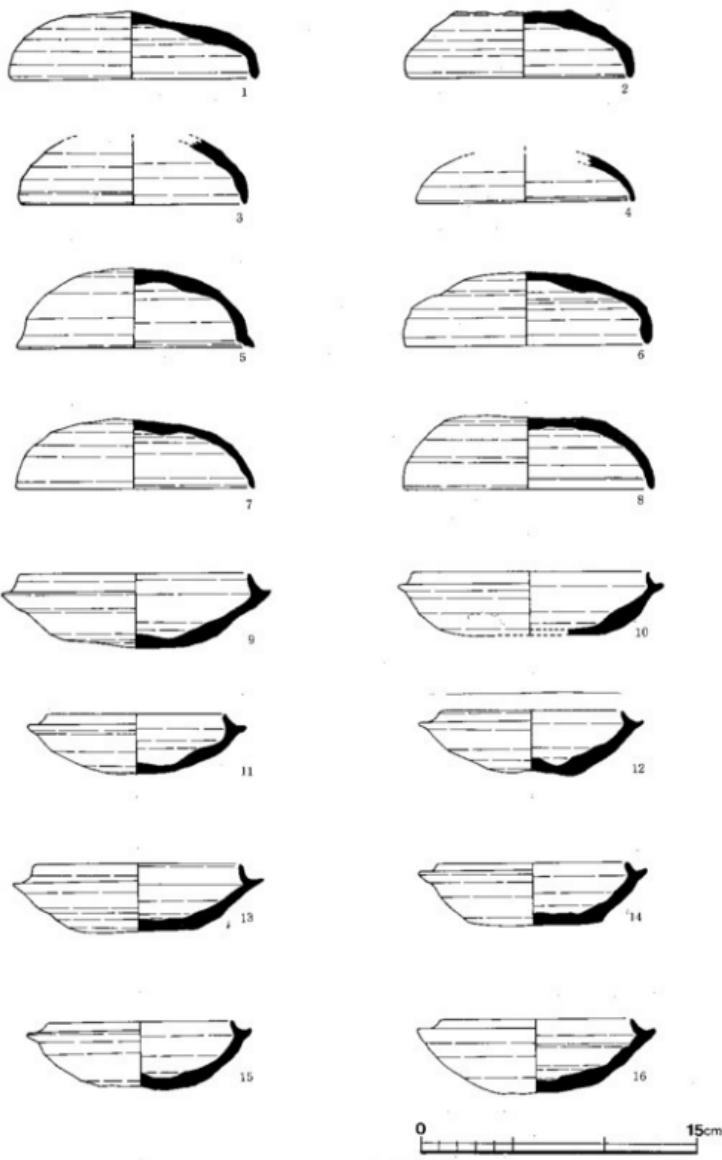
番号	全長	全幅	重量	鍔身長	莖長	形式	備考
T 1	9.7	3.1	11.7	4.5	5.3	三角形平根式	完形
T 2	8.2	3.1	10.3	4.7	3.5	〃	莖部欠損
T 3	7.5	3.1	10.3	4.5	2.9	〃	〃
T 4	7.5	3.0	11.3	4.6	2.8	〃	〃
T 5	8.0	3.7	11.9	4.0	4.7	腹抉平根式	〃
T 6	7.7	3.0	9.7	4.6	3.6	〃	〃
T 7	7.6	2.7	11.7	5.3	3.7	〃	〃
T 8	9.0	1.3	7.0	5.1	3.9	柳葉形平根式	〃
T 9	7.6	1.3	4.8	3.5	4.2	〃	先端部欠損
T 10	6.6	2.0	6.5	4.8	1.9	〃	先端・莖部欠損
T 11	4.6	0.6	3.8	—	4.6	不 明	莖部

第4表 金環計測表 (単位はcm, g)

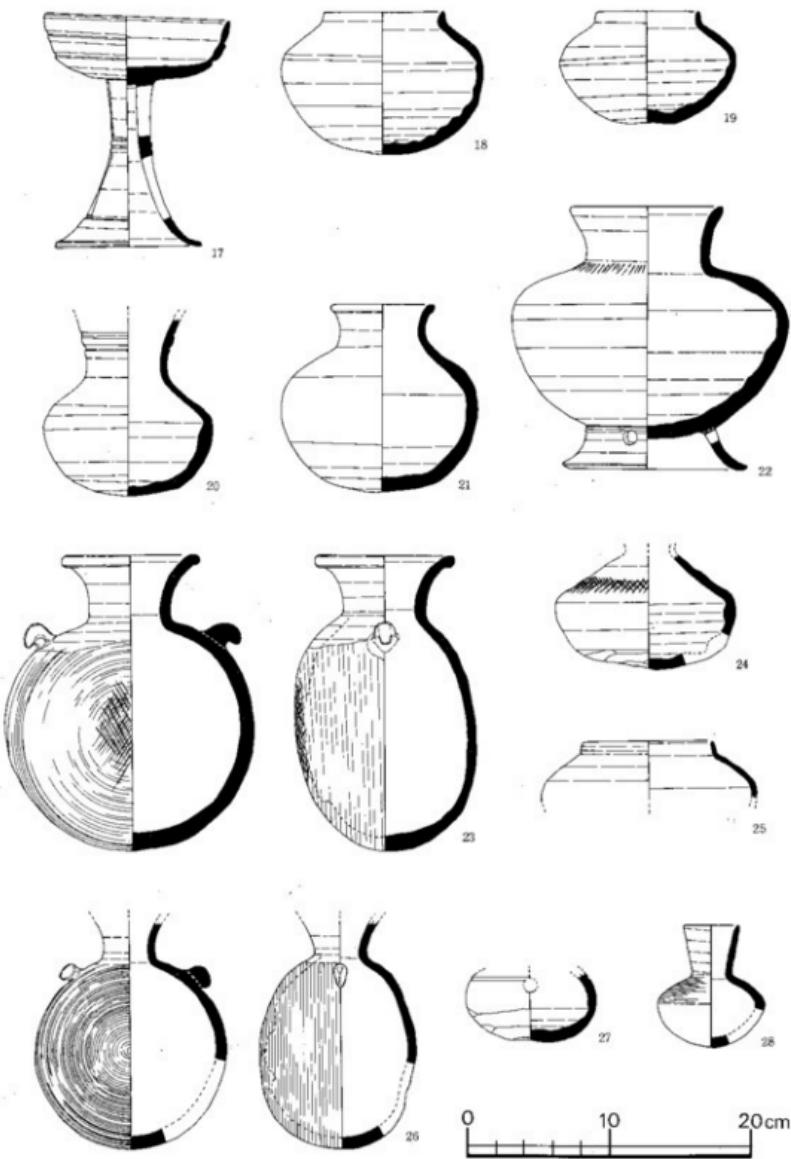
番号	外径	内径	太さ	重量	材質	備考
J 1	3.2	1.7	0.8	24.6	鉄芯金張り	ほぼ完全に残る
J 2	3.3	1.5	0.9	29.6	※	やや残りが悪い
J 3	2.8	1.4	0.6	18.8	※	金張りがかなり剥落している
J 4	2.8	1.5	0.7	14.1	※	金張りがほとんど残らない
J 5	2.8	1.4	0.6	15.7	※	※

第5表 玉類計測表 (単位はcm, g)

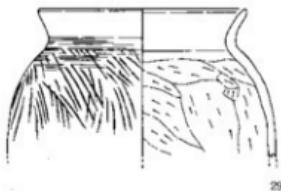
番号	全長	全幅	重量	材質	色調	備考
J 6	2.2	0.8	4.4	碧玉	淡青緑色	透明感あり
J 7	1.9	1.4	1.9	凝灰岩	淡青色	不透明
J 8	1.2	1.4	4.0	碧玉	濃緑色	やや扁平
J 9	1.4	1.5	2.2	ガラス	濃青緑と白	2色ガラス
J 10	1.3	1.4	2.8	※	※	※
J 11	1.3	1.3	3.1	※	※	※
J 12	0.7	1.0	1.6	貝	白色	



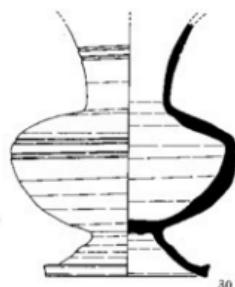
第10図 出土遺物(3) 須恵器



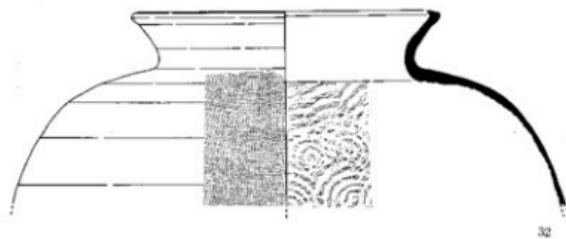
第11図 出土遺物(4) 須恵器



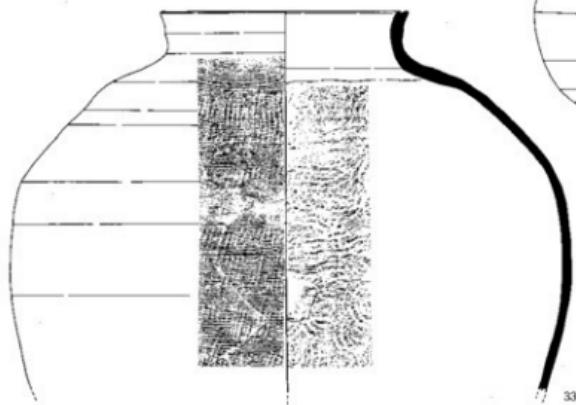
29



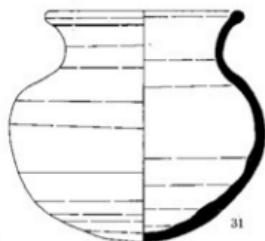
30



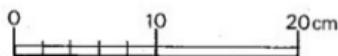
32



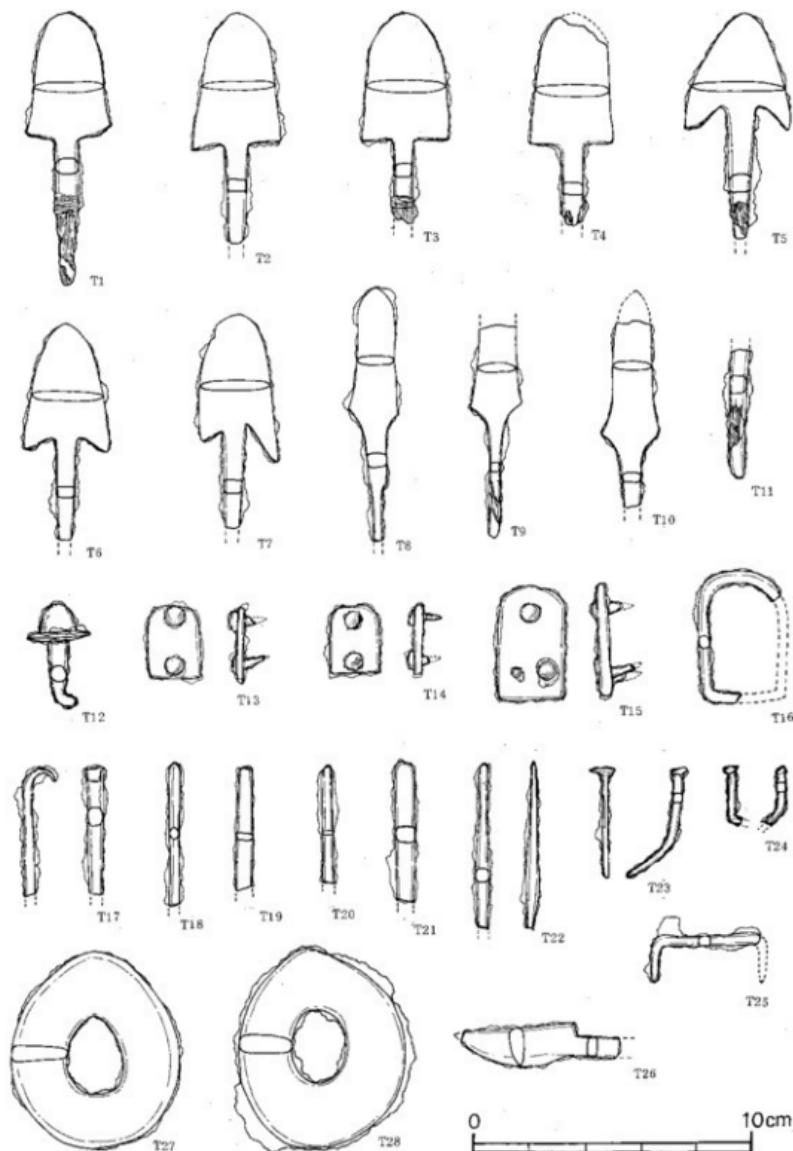
33



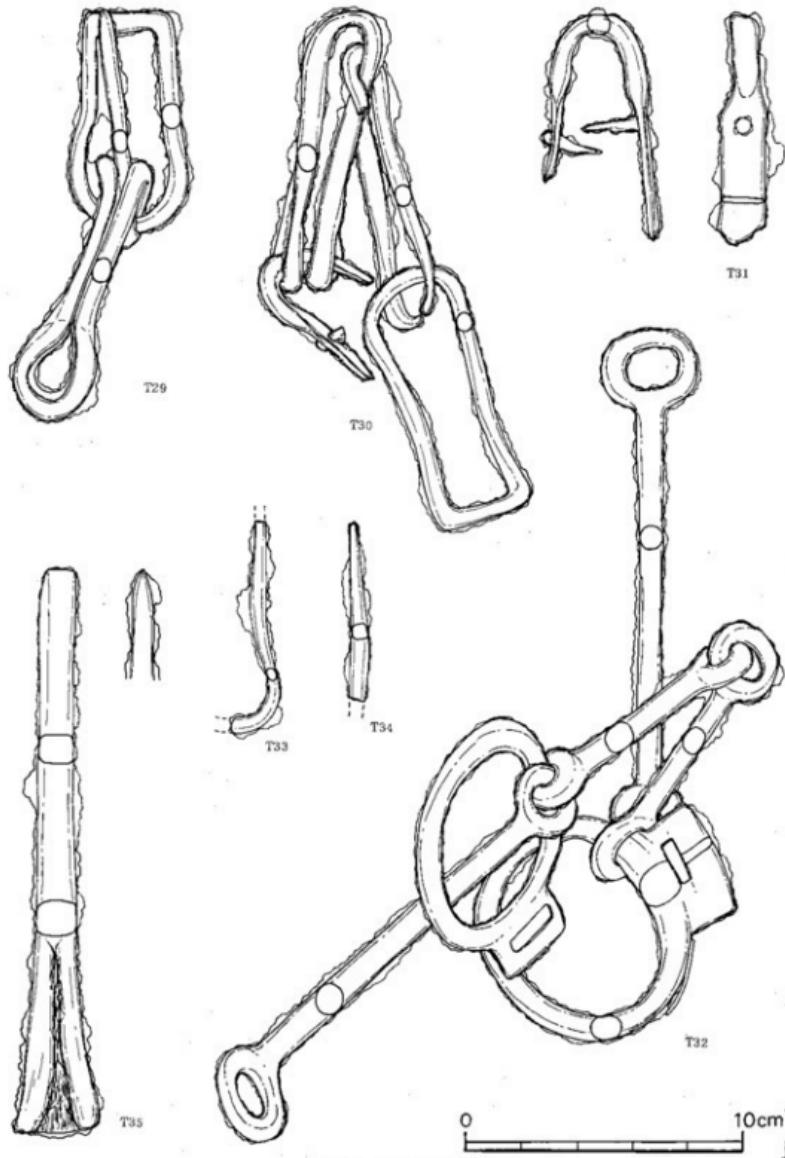
31



第12図 出土遺物(5) 須恵器・土師器



第13図 出土遺物(6) 鉄製品



第14図 出土遺物(7) 鉄製品

図 版



1 遺跡遠景（北東より）



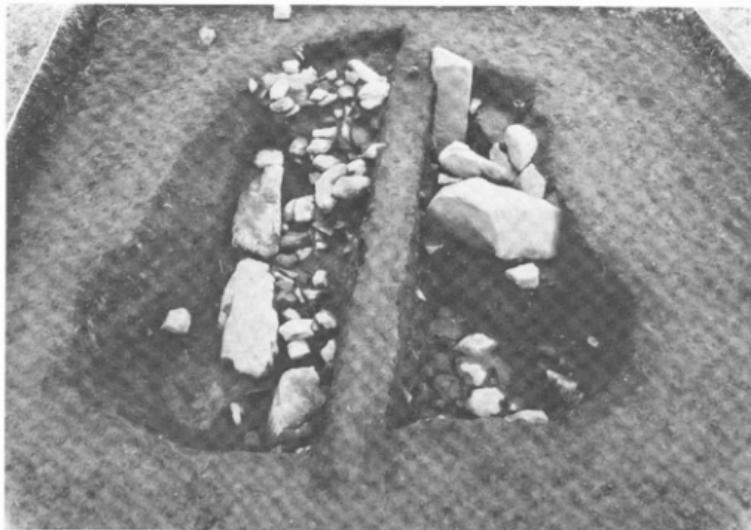
2 古墳遠景（北東より）



1 調査区全景(北東より)



2 古墳近景(北東より)



1 石室発見状況



2 石室検出状況



1 羣道閉塞状況



2 羣道閉塞・遺物出土状況（玄門より）



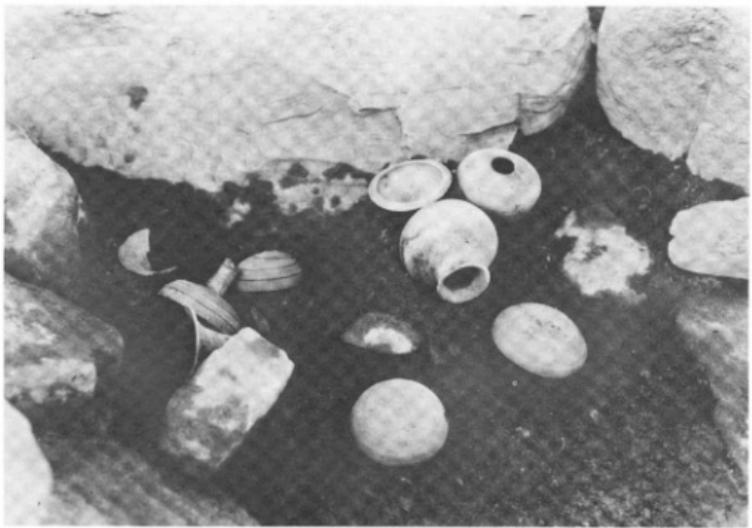
1 羡道遺物出土狀況



2 羨道遺物出土狀況



1 羹道左壁遺物



2 羢道右壁遺物



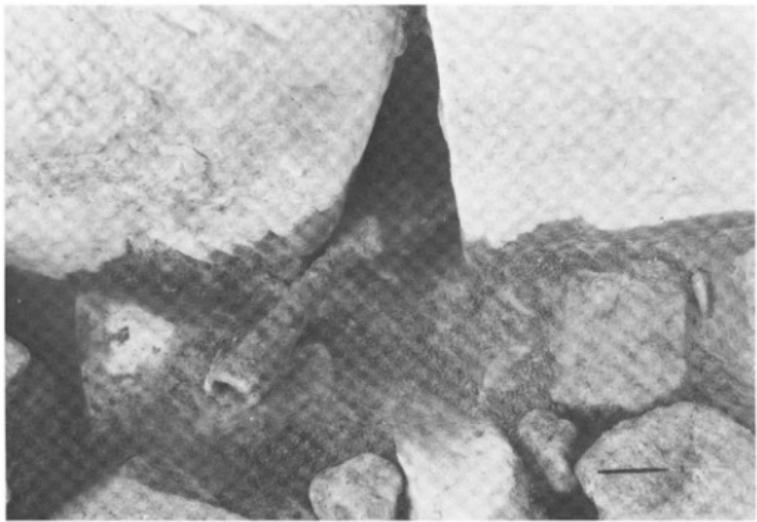
1 玄室左袖部遺物出土狀況



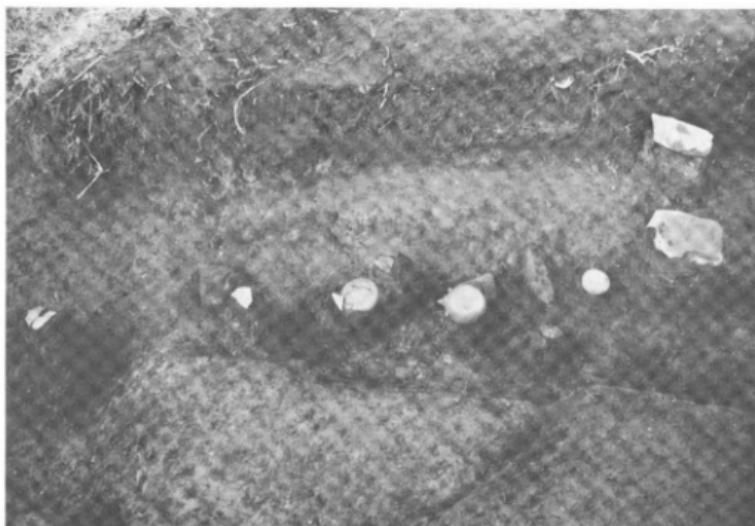
2 玄室左袖部鐵器出土狀況



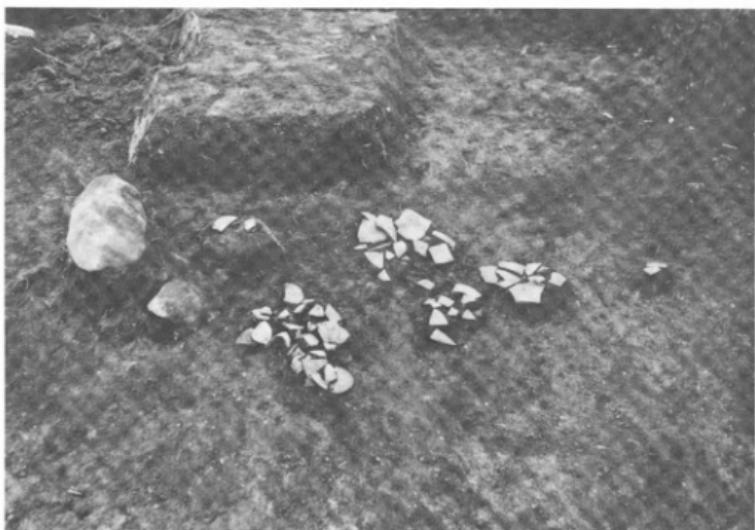
1 玄室左袖部壁出土状況



2 玄室右壁鐵鋒出土状況



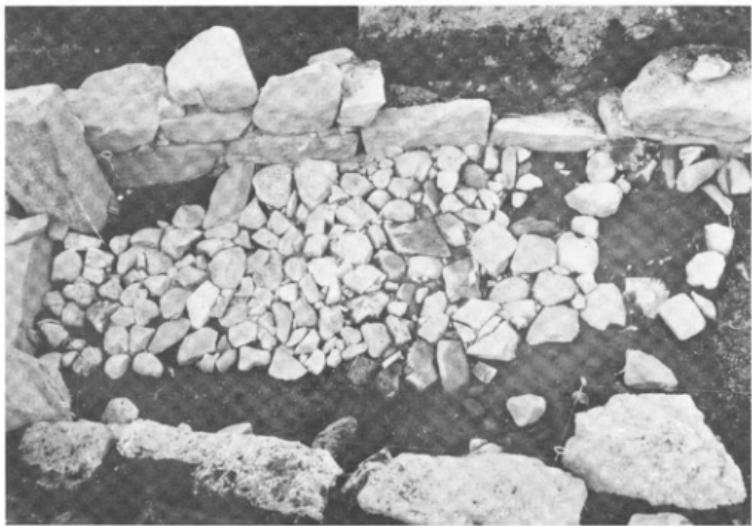
1 墓道遺物出土狀況



2 周溝遺物出土狀況



1 石室全景・掘方プラン



2 玄室敷石



1 羨道左壁石組み



2 羨道右壁石組み



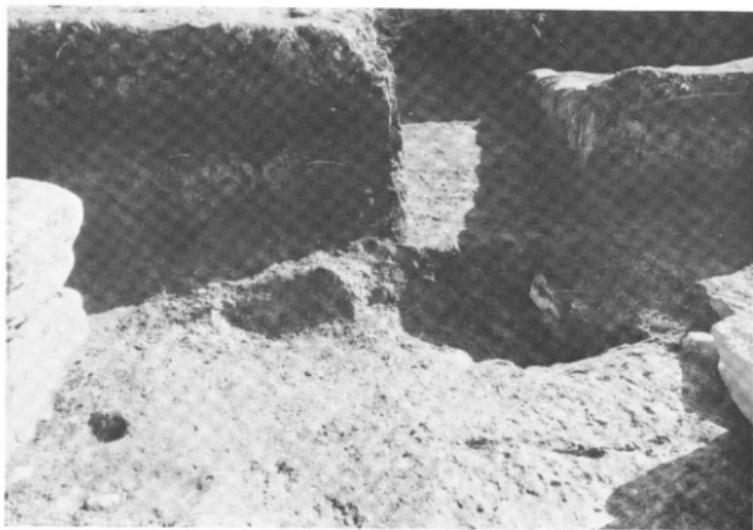
1 玄室左壁石組み



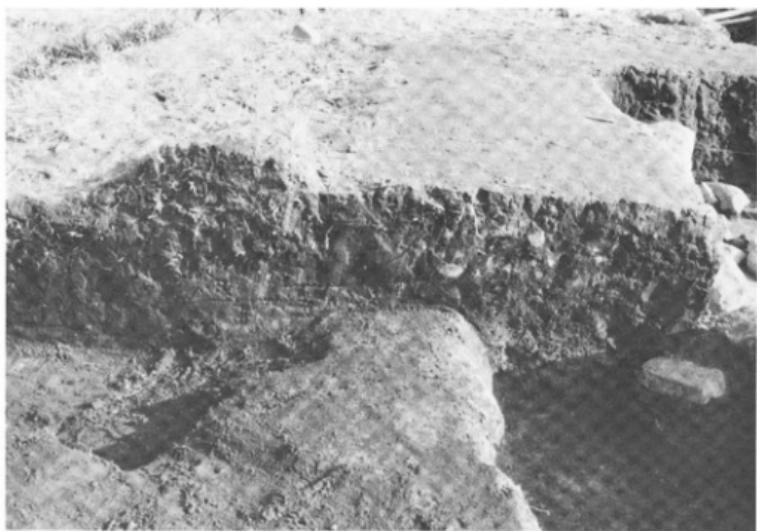
2 玄室右壁石組み



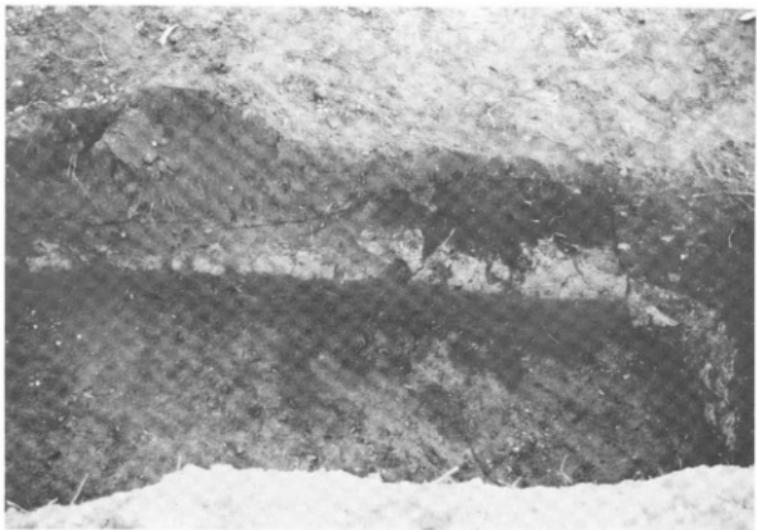
1 石室全景(敷石除去後)



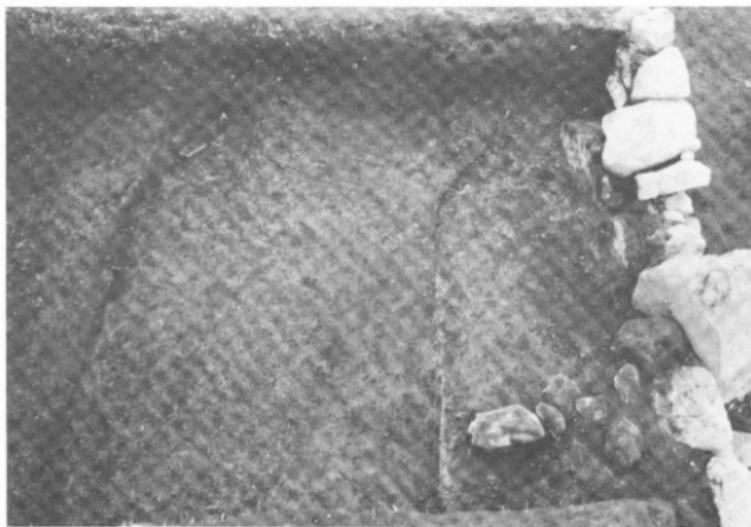
2 奥壁抜取痕



1 墳丘・掘方北側セクション



2 墳丘・掘方東側セクション



1 南壁裏面・住居址検出状況



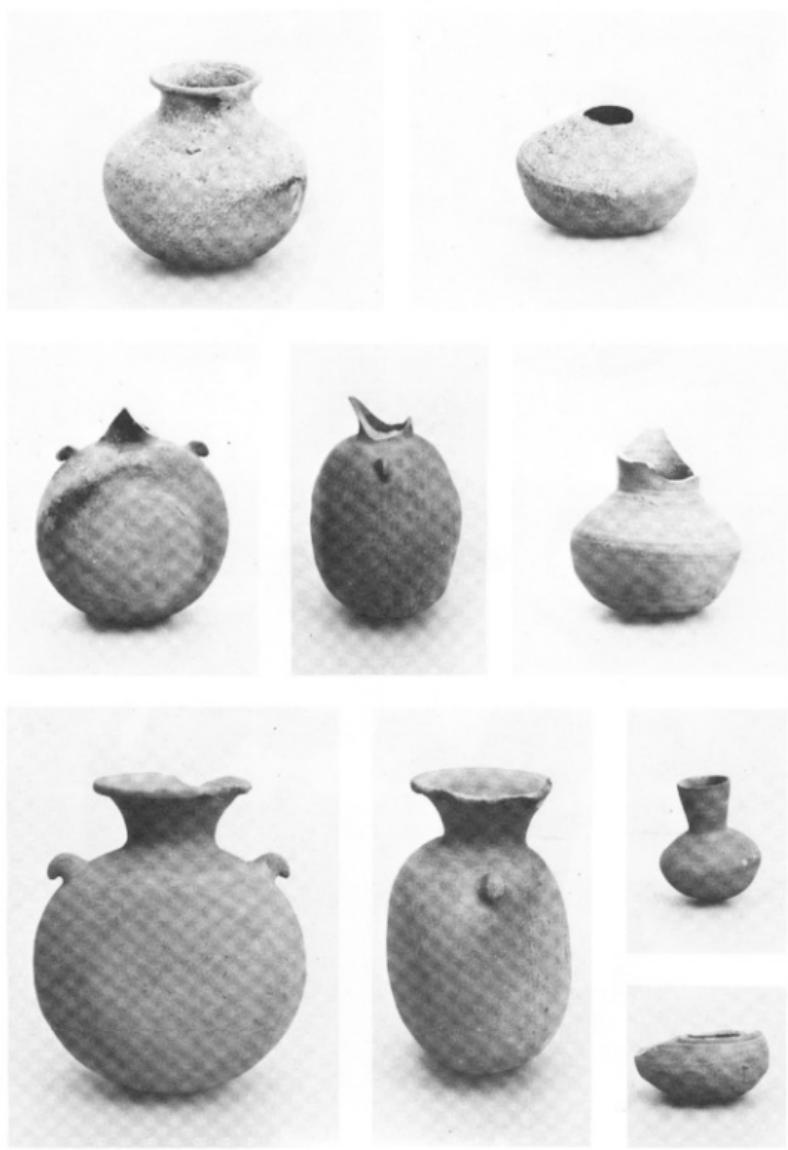
2 完掘全景



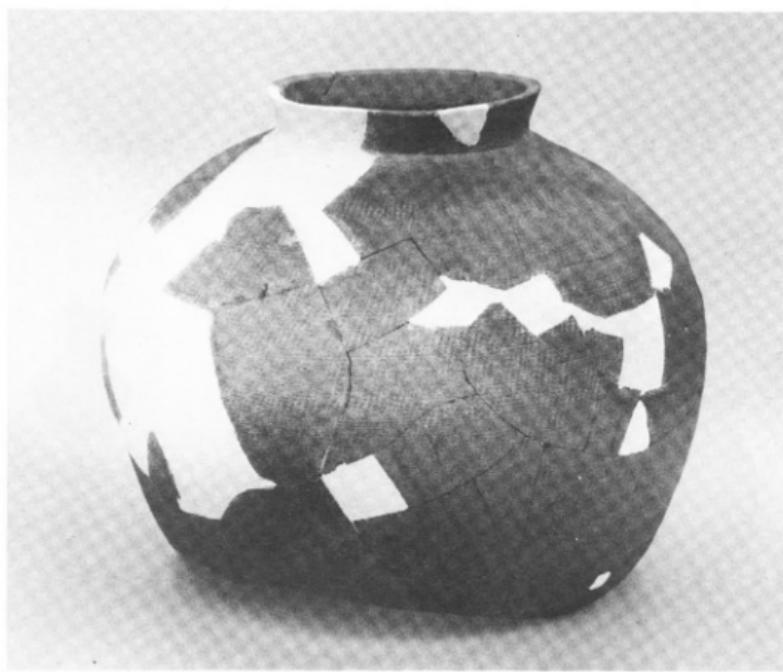
須惠器(1)



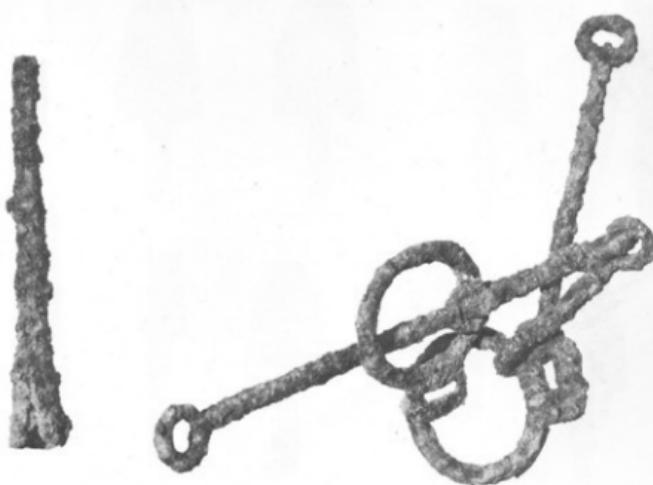
須惠器(2)



須惠器(3)



須惠器(4)



1 鉄製品(1)



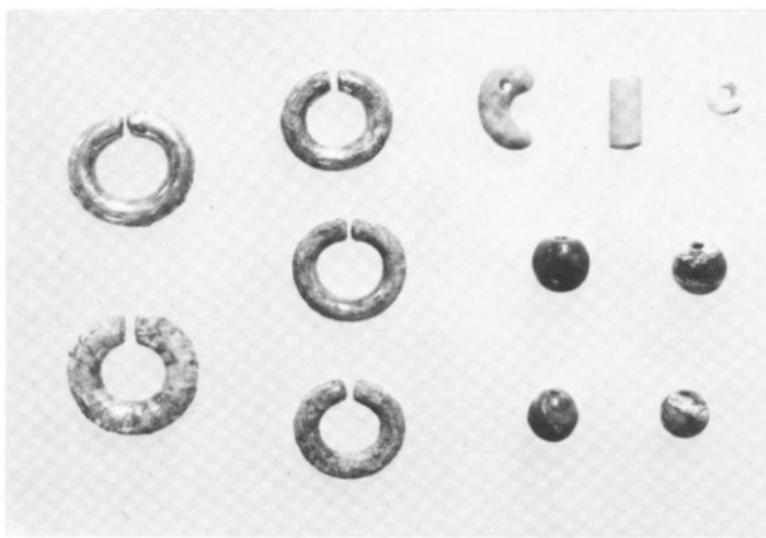
2 鉄製品(2)



1 鉄製品(3)



2 鉄製品(4)



1 装身具



2 弥生土器・土師質土器

四国横断自動車開設に伴う発掘調査報告書

口ミノヲ谷古墳

1984年3月 発行

編集 高知県教育委員会

発行 高知市丸ノ内 1-7-52